

国際階級闘争資料集

No.1

- * 国際反帝派から世界党へ
— その現局面と方向 —
- * ドイツSDSの現局面
- * ほのおの5月、そして……？
— フランスの現局面 —
- * アメリカの現局面
- * キューバ・アルジェリア共同コミュニケ
- * チェコ侵入と労働者国家をめぐる論争



共産主義者同盟国際部

国際反帝派から世界党へ

その現局面と方向

1

激化する三ブロック階級斗争

一、第三世界の階級斗争

植民地独立・民族解放斗争は、現代世界が流動と転換の中に立っていることを、不斷に立証する。火であり、現代世界の矛盾の集中的表現である。

①ベトナム戦争を基軸とする後進国階級斗争は、すでに何度となく主張されたように、第一には、アメリカを中心とした帝国主義の戦後型植民地支配（資本投下による垂直結合）に対する反乱であり、第二に、政府的独立を勝ち取りながらも、国民経済の破綻の由に買弁化し、自国を帝国主義者に再び売り渡した軍事独裁買弁ブルジョアジーに対する、武装した農民の永続革命運動としてである。

②植民地解放斗争の圧倒的發展と、帝国主義者の敗退は戦後世界支配体制の再編をめざした、諸ヘゲモニーに流動をもたらしている。すなわち、ベトナムをめぐる、ハト派・タカ派の諸帝国主義者・各国帝国主義の独自化。

ソ連・中国両スターリニストの国際共産主義路線をめぐる対立。非同盟中立路線に代る、武装ゲリラ派の登場。全世界的規模での反帝新左翼の抬頭。それらが全体として、反革命体制の再建か、世界プロレタリア革命かを賭けた斗いの主役として登場している。

③ベトナム解放戦争は、大統領選挙前にした米帝の「和平交渉」プランによって、あたかも中断されているかのような印象を与えてはいるが、南ベトナムでの戦斗の激化、更には非武装地帯北側への砲撃の再発（十一月二十六日）にもみられるように、逆に一層全面化しており、解放地区の確立と統一戦線の整備を軸に、この冬に予想される「最終局面」にむけて、解放戦線的一切をかけた準備が進められている。

植民地解放斗争の永続的發展と拡大の傾向は、十月以降、急速に強まっている。すなわち①メキシコではオリンピック終了に伴い、オルタス大統領の独裁支配に反逆する革命派のスト続行とゲリラ活動が開始され（十月二八日）、②ガテマラ、ボリビア等中南米諸国

では、八月のメキシコの反乱に触発されて、ゲリラ活動から大衆斗争への發展が勝ちとられつつある。

④パキスタンでは十一月十日以来、授業料・物価値上げに反対し、政治的自由を要求する学生と賃上げを要求する労働者が各地で蜂起し、それはアヌプ・カーン打倒斗争へと永続化している。⑤同じ頃、インドでは、北部を中心に、学生が決起し、六つの大学が閉鎖されている。

⑥アラブ諸国でも、民衆に基盤をもった武装革命勢力を伸しつつあり、とりわけアラブ連合では、アレキサンドリアを中心に二二日以来、数千人の学生が、ゴマ内相の辞任や検閲制度の廃止を要求して大学を占拠している。

⑦これとならんで最も注目すべきことは、インドネシアで新たな武装ゲリラ隊が組織され、活動を再開し、全面的蜂起の機をうかがっていること、そして、南朝鮮では、全日成の南鮮解放計画の下に、ゲリラ戦の準備が進められていること（十一月二十日）である。

二、先進国反帝斗争の激化

先進帝国主義国内部における階級斗争が、今や再び、世界革命の中心としてその巨大な姿を現わしてきている。

①フラン危機に際して示されたものは、国際通貨体制の動搖以上に、フランの切り下げが、

マルクの切り上げをめぐる仏・独両帝国主義の対決であり、その中のドイツの優位の確立であった。

ドル危機と金の二重価格制以来、不断に動揺し、一挙的通貨危機への端に立っている、国際通貨体制の中で、生産力を基礎とした世界市場再分割戦がおしすすめられている。諸帝国主義の赤辣な対立関係は各国帝国主義の危機を国内的に押しよせさせることを余儀なくさせている。(緊縮財政、増税、物価高、賃上げストップ)

②後進国武装闘争の拡大・激化は、帝国主義の植民地支配が、経済的なものから政治的・軍事的なものへと貫徹されることを困難にしている。ダイナミックな侵略と、そのための収奪を国内で再分配することの困難性が、資本主義の危機を国内に蓄積する結果となつていく(都市問題・公害・教育・黒人問題)

③帝国主義対立の有利な展開と、植民地への政治的侵略を保障するものは、帝国主義軍事力の増強と、国内での強権的支配体制の確立である(核武装と核拡散防止条約、非常事態法・ニクソン―福田路線)

④帝国主義間対立と民族解放闘争の存在に規定された国内危機の高まりは、先進国階級闘争を不可避的に激化させている。すなわち、不断に形成されるベトナム反戦闘争に誘発され、それと結合しながら、自国の経済構造と強権的支配体制に直接対決する反資本主義・反政府運動が、さしあつては学生・黒

人といった周辺部から出発し、更に労働者本体的中へと巨大に発展している。この運動は、警察・軍隊との肉体的対決の中から武装し、都市ゲリラから学園、工場占拠、そしてゼネストと武装蜂起へ、すなわち、革命か反革命かを賭けた決戦へと進みつつある。

三、労働者国家、とりわけ東欧における階級闘争の形成

今日世界が、もはや戦後でも戦前でもなく、新たな流動期であり、一つの過渡期であることは、東欧における独自の階級闘争の形成によつても明らかである。

①コマコン体制内の経済的不均等発展は、ソ連に從属した計画経済体制に対する、ナショナルな一国民衆経済体制を要求させた。(特にユーゴ・チエコ・東独)この新たな国民計画経済を担うテクノクラート―新官僚層は、各国において、支配構造の再編を、すなわち、旧官僚層(ポトニー・ゴムルカ・ウルブレヒト)の打倒といわゆる「非スターリン化」を要求している。

②ソ連をはじめ、東欧各国で採用された、市場経済・利潤導入等による資本主義経済化は、そのような一国民衆経済化の原因であり、結果であるが、その中で、国内の経済危機が、経済構造(農業―工業―消費)の不均衡・賃金格差の拡大という形で現われ、激化していった。

③この危機を、新旧官僚支配の打倒とプロレタリア民主主義独裁の再建へ、ドイツ・フランス革命と結合した世界革命の主体としての再登場へと利用し、新たな永続的階級闘争を担うべき革命的左派(フランス共産党)はまた不十分な力量しかもっていない。

④このような客観的・主体的条件の結果として、東欧階級闘争は、ドブチニク等新スターリニストの西欧帝国主義と結合した資本主義化路線と明確に対決する形で登場しておらず、この新官僚層が、自己を権力につけるために利用すべく、上からくり出した形式的な「政治的民主化」運動の枠内に自身をとじてめいている。

2

先進国階級闘争の現段階

一、反戦闘争から反帝闘争へ

帝国主義的再編は、全社会体制のあらゆる

四、三ブロック階級闘争の結合

これら三つの世界の階級闘争は、帝国主義の市場再分割戦と強権的市場支配によつて結合させられている。これらの国々の階級闘争戦路目標は、全世界の帝国主義の打倒、自国の強権的支配体制の粉碎、そして世界一国民衆革命にある。

すなわち、植民地解放闘争に課せられた任務は、反帝闘争の永続的発展と、その社会主義革命への転化であり、先進国階級闘争のそれは、自国民衆主義の侵略・抑圧体制を打倒することであり、東欧のそれは、帝国主義と和解し結合するすべての官僚を打倒し、世界革命の根拠点として再生することである。



決的闘争として出現しており、それとの関連で、ベトナムに反戦闘争は、自国の侵略・抑圧政策との対決―反帝権力闘争へと不断に発展している。

二、闘争の質的転換を

二、論争点

反戦闘争から反帝闘争への質的転換は、遅れて運動が出現したイギリスを除いて、各国左派の分派闘争をひきおこしている。この転換と分派闘争に伴う問題意識のレベルと論争の具体的内容は、一般的には次のように整理される。

(1) 民主主義闘争からプロレタリア社会主義権力闘争へ

①アメリカのSDSは、八月シカゴ民主大会で民主主義目標に関する論争が全面化した。民主的・社会的な学生同盟は「社会主義をめざす」組織へと発展すべきである、という主張が多数派となりつつある。とはいえ、多くの地区で「社会主義」概念が不明確であるため、この綱領変更はまた実現されていない。

②黒人運動は従来支配的であった「公民権奪取」「ブラックパンサーリズム」から「黒人権力闘争」へと移行しているが、それに伴い、どのような権力を、いかに獲得するかという論争が開始されている。すなわち、SN

CC右派が地区闘争―地区権力を、地区における政治的・経済的ブルジョア権力の獲得という、黒人ブルジョア化として押し進めるのに対して、SNCC左派とブラックパンサーBPPは、社会主義革命・プロレタリア権力との関係の中で、黒人権力闘争を位置づけ、そのための方法として都市ゲリラ・都市解放区、アメリカ社会を内側から変革すべき白人労働者と結合した外側からの革命を大胆に追求しつつある。

③ドイツのSDSは、大学・工場での占拠闘争地区での長期的闘争を背景にした。中央権力闘争を、非常事態法の内実としての国防軍―NATO粉砕闘争として設定している。

④これらの権力闘争への移行は、第一には、フランス五月「革命」におけるダイナミックな権力闘争への展望、第二には、日本全学連の武装街頭・学園占拠闘争に影響されている。カンパニアから実力・権力闘争への発展の中心軸は、概念としての「権力闘争」論争にもかわらず、その戦略・戦術の不明確さの故に、具体的には設定されていない。しかし、帝国主義軍隊との対決が、自らと植民地人民の解放にとって不可欠の条件であること、軍隊解体のためには、外部からの空襲のみならず、兵士の不服従・脱走・反乱を組織しなければならぬことが確認されている。

(2) 闘争の組織性

①ドイツのSDSは、「行動から運動」への発

展・すなわち、闘争の組織性を獲得するために、反権威主義的左派の旧来の非組織性を克服し、闘争の細胞としての「基礎組織」―行動委員会・地区反戦・職場反戦にあたるものを建設していくことを方針の中心点とした。

②ブラックパンサーは、アメリカSDSの戦闘性を評価しながらも、その非組織性・個人主義を批判し、組織され統制された都市ゲリラ・学園占拠闘争を準備している。

(3) 労働者の獲得

①権力奪取という目標設定は、労働者の獲得を理論的レベルではなく、実践的問題としていっている。ニューヨークで活躍する「労働者世界」派は、労働者としての黒人とフアホワイトとの団結を綱領の中心としている。

②アメリカSDS左派は、革命主体とは何か、という問題意識の中で、現在バラバラに異なったレベルで斗っている学生・黒人・労働者を位置づけなおし、それらの結合の可能性を追求している。

③ドイツのSDSは、労働者との結合をめぐることで、組合・社民左派と結合する合法主義者スターリニストと組合「左派」を体制内化した労働組合の補完物として批判し、独自の労働者政治組織たる「基礎組織」を建設する左派とに分裂している。

④フランスでは、五月革命において表現した労働者と学生の結合を、組織的・目的意識的におしすすめるための作業が、JCR―ル

①ソ連のチエコ侵入は、各国左派の内部に、ソ連型社会主義の批判と、自己がどのような社会主義をめざすのか、という論争をひきおこし、他方、東欧における革命的左派との結合を、現実的な課題とした。

②SNCCは、新たに国際部を設立しアメリカの黒人解放斗争との直接的・物質的結合を軸に、ブラック・インタナショナルリズムを出発点としている。またアメリカSDSは、「解放情報サービスセンター」を基軸に国際情報交換をおこなっている。

③国際主義というものは、単なる経験交流以上のものであり、自国帝国主義の打倒を中軸とした。世界革命戦略が、各国革命の不均等な成長を含まないで、同時的・同質的なものとして確立されなければならない。この点については、いまだ不十分ではあるが、そのための努力は、8・3東京会議以降、9・13フランクフルト、9・24コロンビア大学、10・2ロンドンと数回にわたる国際会議によって積みかさねられており、一月にはハバナ国際会議が日本の提案によって準備されている。

三分派斗争と運動の再建

以上のような論争点を伴った、各国階級斗争の質的転換は、新左翼内部の分派斗争と分裂を不可避のものとしている。ドイツSDSの分裂、フランスJCRと中共派の対立、SNCCの左右分派斗争とBPPの勢力拡大等、反帝左派が運動のケベモノを握りつつ、スターリニストや右派から自己を決別させつつある。

このような分派斗争は、一定の運動の後退をもたらしてはいる。しかし、特にアメリカにみられるように、運動が地方に拡大し、地方での組織化が進み(チアガラSDS)あるいは大都市の下部単位(特に学園)で左派諸潮流のすべてを結集し、(例ニューヨーク州立大学)そのことによって運動が維持され

争の質的転換は、新左翼内部の分派斗争と分裂を不可避のものとしている。ドイツSDSの分裂、フランスJCRと中共派の対立、SNCCの左右分派斗争とBPPの勢力拡大等、反帝左派が運動のケベモノを握りつつ、スターリニストや右派から自己を決別させつつある。

3

国際政治の流動化と革命的国際共産主義

ベトナム「和平」、チエコ事件、フラン切下げをめぐる10ヶ国蔵相ボン会議等によってこの秋、一層の流動化を強めた国際政治は、69年夏のNATO改編、国際共産党大会、そして70年安保にむけて、一つの決戦期に入ろうとしている。

(1)

すなわち、帝国主義諸国においては、アメリカのニクソン路線、フラン引下げをめぐるドイツ帝国主義の抬頭とヨーロッパ支配ヘゲモニーの獲得、ドゴールの最後の賭、佐藤三選による佐藤・福田路線等々の諸条件の下でドイツ・フランスの総選挙を経て、69年NATO、70年安保の中で、諸帝国主義間の力関係の再編がなされようとしている。とりわけ

再建されている。新たな大衆的斗争の爆発は、この分派斗争が革命的左派の圧倒的勝利の下に収約されることによつて、またこの革命的左派が国際的に結合することによつてのみ保証される。そのきざしは、アメリカ大統領選挙における三候補者(ニクソン・ハンフリー・ウォーレス)すべてに対する各地でのデモと、ニクソン就任式粉砕の宣言、あるいは10月4日ベルリンではじまつて以来の一五〇〇人の武装デモ、イタリアでの11・14ゼネストと武装学生への支援に、五月の再編を準備するフランス危機の中に示されている。

(2)

他方、「労働者国家圏」においては、ソ連はチエコ侵入、ベトナム和平とその反革命的役割を二層明確にしたがらも、国際共産主義運動の総本山としての地位を回復しつつある。第一に、チエコ事件をめぐる論争は、ソ連の「大國主義」を批判する仏・伊共産党が、革命路線においてソ連と同根であるが故に、ソ連路線に再収約されている。

第二に、ソ連を批判し、「チエコの革命的人民」を支持する中国は、その具体的国際政策に欠けるが故に、ソ連に対抗できず、またその中立地帯論故にアメリカにおける親中共派政府を失いつつある。例 マリのクーデター。

こうして、根拠地としての役割を放棄し、反革命としての機能する「国際共産主義運動」は、十一月二日フタバエストに六七党を結集し、来年三月の準備会を経て、五月モスクワ本会議を実現しようとしている。

このようなモスクワの指導性の回復に対して、客観的には、キューバ・中国、更には自

主独立派の国際主義路線の再建が要請されている。とはいえ、国際主義路線の放棄を内容とする自主独立派は、依然として「大國」の視座物に止まるであらう。

④内戦の全面勝利を宣言した中国は、台湾・南朝鮮解放宣言を手にじめに、全面的な国際路線の展開を準備している。その中で、アジア・アフリカの武装ゲリラの指導権の回復とならんで、ヨーロッパ・日本での「中共派」に対する指導力の貫徹が試みられたとしても、その戦略が、依然として反米愛国、中間地帯論では、有効な世界革命根拠地たり得ないことは明らかである。

来年一月に革命運動百年をむかえるキューバは、中南米斗争の根拠地として存在しているが、チエコ事件とメキシコの反乱に対する無方針は、キューバ路線の限界を示した。キューバを世界革命の、とりわけ南北アメリカ革命の根拠地として再現することは、キューバの存在それ自体のみならず、一方ではカストロの国際路線の明確化と他方では、それを可能にする日米欧の階級斗争の一致したカストロに対する議論が必要である。

(3)

このように69年は、帝国主義者にとつてもソ連・中国・キューバ等にとつても国際政治の年としてある。

他方、第二・第三のベトナムとバリの拡大の傾向は、各国左派・革命的共産主義者に対

し、帝国主義者とスターリニストに対抗する独自の国際主義路線の明確な樹立を要請している。それは、帝国主義者の排外主義と侵略抑圧体制に対し、また、小ブル平和主義・組合経済主義の社会排外主義の転落に対して、労働者・学生を革命陣営に確保するものであり、他方、世界一國同時革命の展望を主体的に担いうる世界党の建設に寄与するものである。

そのような国際主義路線の確立を、主体的組織的に担いうる部隊は、8・3国際会議を

準備した日本の革命派においては、現在の局面においては、突出した日本階級斗争の任務は、NATO安保斗争を一月の爆発でもつて全世界に示し、更には代表団を各国に派遣し、交流と論争を積極化することによつて、各国左派の再編過程を革命派の国際的結合の下に、領導することにある。

具体的には、①各国左派との情報交換の再強化、②一月南北アメリカへの代表派遣をおこなう、③その成果をふまえて、④四月各国へ代表派遣、アメリカでの国際会議へ

の出席、⑤六月国際学生連再建の獲得と、青年共産主義者インター結成のための具体的準備組織の実現、が、計画的・組織的に準備されなければならない。

これらの活動を現実保証し、70年世界階級斗争の中から明確な世界革命綱領と世界党を建設していくことを展望しうるものは、日本の全学連と反戦青年委の大衆斗争と、それを国際的視野をもつて指導しうる共産主義者同盟をおいては他にはない。

1 ドイツSDSの現局面

ドイツSDSは九月十三日、第23回大会(於フランクフルト)において、ソフィア事件の責任者として、東独共産党SEDにつながる代議員五名の除名決議を契機に、ついに分裂した。

1/5の勢力をもつた「伝統主義的」なヌターリニスト派は、H・リードナー(エンツェン)を中心に、新たに建設された合法共産党DKPに還流した。これに対し、ドチケベ

ルリン(ベツベル・マンハイム)を中心とする主流派「反権威主義派」は、新たに機関紙WAS TUN(何をなすべきか)を発行し、SDSの再建・発展をおしすすめて

いる。昨年秋以来、分裂の危機が伝えられていたSDSのこの分裂を決定的なものにしたのは、次の四事件であった。①五月の非常事態法斗争をケルン大学はバリ

ケードによる学園占拠で闘っていた。これに対しスターリニストは、「極左買収主義」排発戦術であると批判し、バリケード破壊をはかり、SDS左派とゲバルト戦。

②七月二十八日、ソフィアで開かれた国際青年学生フェスティバルで、米大使館デモを実行したSDS代表ヴァルフ議長らに対し、ブルガリアの秘密警察とスターリニストがテロとリンチを加えた。

③パリの「五月革命」におけるフランス共産党のコーン・パンディ攻撃と、反革命的役割。
④ソ連のチエコ侵入に反対するデモ。ソ連型

1

ドイツ階級斗争の質的転換

我々はこの分裂を、スターリニストと反権威主義的左派との、日和見主義者と革命との当然のありうるべき分裂として、単純化する事はできない。まず最初に、この分裂が、ドイツ階級斗争の発展のどのような段階に規定されているのか、SDS総体が何を共通の認識として、何を明らかにしなければならぬ。とりわけ「WASTUN」に総集する左派自体が今なお共通の綱領を持たず、諸々の見解が、個人論文の形で提起されている時点では、その発展・結実の方向を明白に判断する上でも、そのことが重要である。

この分裂は、65年のベトナム反戦斗争を契機に新たな高揚局面に入ったドイツ学生運動が、批判大学・ドナテ・シュプリンガー斗争、そして非常事態法斗争を闘う中で、あるいはまた、フランスの五月「革命」など、外国での斗争の衝激をうけて、この一年間に

「社会主義」およびチエコの「自由化」をめぐる論争。

大きな質的転換を、すなわち、反戦・平和・反米運動から、反帝・自由帝国主義の打倒・世界革命斗争への転換をせまられてきたことに規定されている。SDS左派はそれを批判・抗議から抵抗・革命への発展であるとして表現している。

そしてこの分裂の危機の現実化は、そのような質的転換をSDSが、主体的に、すなわち、情勢論というよりは主要には組織論・階級形成論としてうけとめ、新たな運動の発展を自ら保証することをせまられたからに他ならない。

SDSの、とりわけその左派の特質は、「個人主義的急進主義」と「非組織主義」にあり、それは運動の量的発展に寄与することが出来た。この量的発展は、他方において、同盟の官僚主義的中央集権主義・代行主義を不可避的にもたらして、左派は、ドイツ社会・労働組合・政党の権威主義的支配構造と闘う一方

この同盟組織内の権威主義的傾向に対しても、自己の「反権威主義」態度を強調してきた。しかし、ドイツブルジョア階級の強制的支配構造との直接的対決と、ドイツ革命を展望する運動路線の確立の必要が、この「反権威主義」派をもつて、「下からの自発性と基礎的組織」を支えられた。組織された運動体の確立を主張せしめていた。

SDSのこの組織的強化再編は、学生運動から労働戦線への介入、プロレタリア階級斗争への発展にもあつていいる。すなわち、従来、学生運動は「学生の意識に内在する高度工業社会における疎外感」として論理化され、あるいは第三世界との感情的連帯の中に位置づけられていた「一回大会」。この一年間の

2

非常事態法斗争の総括

非常事態法の第四読書会の通過後、活動家の間を一種の挫折感がおそい、政治的「真空」状態が生じた。この挫折感は、一つには斗争目標が見失われたことに、一つにはこの斗争の中で労働者の獲得の必要を痛感しながらもそれに失敗し、それが不可能なこととなつたと考えたことに由来している。

非常事態法斗争は、首都ボンに数万人の学生を全国各都市から動員した。五月十一日の

新資本主義批判、国家支配構造の批判（国家独占資本主義論争）を経て、SDSは、先進国プロレタリア革命における学生戦線の先駆的役割、階級主体としての労働者階級の再規定と、労働者の獲得の必要性を明らかにした。更に、「先進国革命を媒介として、第三世界の階級斗争と構造的に結合すること、プロレタリア世界革命を展望すること」が重要な課題とされた。

以上の共通認識の上になつて、具体的にはどのような論争が、とりわけ非常事態法斗争の総括およびチエコ事件の評価をめぐる形でなされているかを、次に明らかにする。

「星の行進」をもつてその第一の山を勝ち取つた。ケルンやルールなど西南ドイツ地方では、この「星の行進」の後、遅くは五月から運動が組織された。ケルンでは、大学占拠を闘う学生を中心に五月二十日、六十名の労働者・学生によって行動委員会が結成され、一万枚の斗争宣言ビラが各工場・学園にまかれ、二十四日には、八〇〇名の集会を勝ちとつた。五月三日に印刷工が五・二八ストを決定し

たのを突破口に、労働者の斗争意欲は高まつた。このため、はじめのうちは斗争を抑圧し防害していた労働組合も、二十八日になって、印刷・パルプ両労連が五・二八ストを指令し、労働者の下からのスト要求を上から再収約しようとした。二十九日には化学・金属労連・フォード労組もストに突入し、労働者三千・学生一五〇〇がデモに参加した。こうして五・二九ゼネストが非常事態法斗争の第二の山となったが、それは同時に、斗争の終結宣言をも意味した。労働組合はこの集会で斗争方針を明らかにせず、労働者のエネルギーは発散されてしまった。三十日には行動委員会は、三〇万枚の斗争ビラをまいたが、労働者の反応はわずかで、二・二〇〇が集会に結集しただけだった。

ルール地方では事態はもつと悲劇的であった。五月二十七日にはボーフムの鉄鋼労働者一〇〇〇が独自の職場放棄を勝ちとつたが、二十九日には労働組合連合が声明を発した。ただストは行なわれず、学生は回りとなく工場へおしかけたが、労働者の反応はまったくなく、警官隊に粉砕されてしまった。

この経験の中から「WASTUN」派は、第一に、行動の自然発生性、非連続性を克服し、目的意識性と組織性を獲得すること、すなわち「行動から運動への組織化」を、第二に、労働者を独自に獲得し、政治化すること、すなわち「自立した意識的労働者を生み出し、結集する」ことを、当面する任務として提起

した。「街頭デモをたんに直接くりかえすことは行動の縮小再生産でしかない」のであつて、その任務は、組合「左派」を批判し

「基礎組織」を建設することによって表現されねばならないとされた。



3

労働組合「左派」批判と基礎組織の建設

高度成長の終エンにより、66年秋以降大市況上げが困難となり、労働者の賃金不満は高まりつつある。しかし労働組合はキーシンガール大連合政府のワケ内での圧力団体の地位に

とどまり、ドイツの権威主義社会の一大支柱の役割をはたしている。山猫ストによる賃金斗争に対しても、労働者の政治斗争の要求に対しては組合は抑圧機構として機能してきた。

労働者の経済的・政治的不満を現在の代表しているのは組合「左派」であるが、SDSは、この「左派」が非常事態法斗争の中ではたした犯罪的役割を攻撃している。すなわち「左派」は労働者のエネルギーを収約し発散させる安全弁であり、組合主義政治の左翼的『いちぢくの葉』となつていいる。非常事態法の通過を許したものは、一つには労働組合の歴史的和見主義であり、一つには、「左派」のみせかけの急進主義である。

この「左派」を「革命的労働者」と同一し、社民左派への還流を要求するグループがSDS内部に存在している。そのグループとはライン・ルール地方で労働者への影響力をそれなりにもつていた伝統的共産党員「スターリニスト派」であった。彼らはなるほど早くから「労働者との結合」と「労働者の基礎組織の建設」を主張してはいたが、しかし、その内容は、「選挙でたれを選ぶかを助けたり、いろいろ要求をかかめる」ものにはすぎない。SDS左派は批判している。

SDS左派は、「組合」「左派」を実践的にのりこけた、反権威主義的労働者を組織化したものとしての「基礎組織」を提起している。基礎組織は「資本主義支配に対する批判の場であり、大衆の自立的参加を段々と拡大する機関」であり、工場・学園・地域に、とりわけ、「危機の集中している企業」において建設されねばならない。ミンヘンの例によれば、労働者が多く結集しているが、一つ

の工場に一人であり、そのため、さしあ
たつては学生生活家がそうするように、「外
から政治をもちこまざるをえない」が、内部
からの形成が追求される場合は、日常斗争を
闘うが常にそれを「全体化させ政治問題化」
しなければならない。これが「WASTUN」
の主張する「基礎組織」の性格と方針である。

この労働者・学生組織・組織的展望は
「過渡的綱領」によって現代革命を担い指導す
る『未来の党』への過渡的組織」ということ
示されており、フランスJCRの組織形態が
その手本となっている。

この基礎的組織による下からの運動の組織
化は、今後の運動の再建・拡大の不可欠の条
件ではあるが、第一に、今後の権力による弾
圧をはねのけ、スターリニスト派との党派斗
争を闘う中で要求されてくる中央集権的全国

的党組織の建設という課題に対し、地方分権
主義的傾向をいまだ強くもっている。そして
それを当面は基礎組織の建設過程において直
接問われないでいるSDS左派が、どのよう
に対処していくかが、今後問われる問題とし
てある。

第二に、この組織建設の過程で労働者を政
治化すべきその政治の質と内容が、すなわち
ドイツ革命をいかに規定しその展望をいかに
切り開くかという「戦略・戦術」が不明確で
あり、帝国主義論・国家論を欠いた組織論の
弱さ、このような基礎（類似したものとして
は、行動委員会・地区反戦）から直接的に党
を展望することの誤りが指摘されねばならな
い。

5

戦術と統一戦線

にきていたが、その執行部が「連支持声
明」を発表したのに対し、下部の左派から臨
時大会が要求され、そこで旧執行部が解任さ
れ、左派の執行部が選出された。その後、旧

非常事態斗争においてSHB (SPD系)
とグルツペ48に代表される戦後インテリは、
「ファシズム化反対」、「民主主義的ポネ
体制の維持」のスローガンの下に民主主義防衛
斗争を展開した。これに対してSDSは、フ
ランス五月革命に示された大衆運動のダイナ
ミズムと、非合法・暴力斗争の必要性を主張
し、選挙による選択ではなく中央権力斗争を
めざして、実力街頭斗争を維持してきた。

この突出したSDSの運動は、大衆的全国
化を十分に勝ちとることができていない。こ
のここからくる孤立感から、一方において
この夏、SDS分裂の前にSDSから離れた
APO派（反議会主義反対派）は、SHB左
派から中共派など極小集団に至る新左翼全体
の結果を主張している（APO派の綱領的立
場全体については、現在のところ不明。①勞

働者との結合 ②議会をのりこえた反帝実力
斗争 ③三つの世界の階級斗争の結合）。他
方、同様の孤立感から、前述のスターリニ
スト派が、合法主義・社民労働者との二着、総
選挙による大衆のかくくをスローガンとす
る合法共産党に還流した。

国際的反対統一戦線については、APO派
以外は明確な路線を展開していないが、「帝
国主義的支配が、植民地においても、その本
国においても等質的」なことから、共通の反
帝斗争部隊の結合をめざしている。またヨー
ロッパ・アメリカ・ベトナム・中南米の各地
の運動との直接結合は、世界革命戦略論的
というよりは、経験主義レベルで進行している
のが現段階である。

4

チエコ侵入をめぐる論争

チエコ侵入をめぐるSDS内の論争点につ
いては、別の論文「チエコ問題」の中でふれ
るが、チエコ侵入がドイツSDSの再編に与
えた影響は大きい。たとえばSDAJの例が
それである。

SDAJ（社会主義ドイツ労働者青年同盟
は、今年の春/夏に各地で組織され、青年労
働者を結集していたものだが、全国的には
スターリニスト派の指導下にあつた。
マンハイムでも執行部はスターリニストが

6

今後の展望

WASTUN「APO」のSDS
左派が九月以降、どのような綱領的立場を明
確化し、諸派の關係がどのようにすすんでい
るかは必ずしも明らかではないが、十月四日

にベルリンで、イースター斗争に参加した件
で弁護士資格剝奪に抗議する一五〇〇名の
学生が、ヘルメント・鉄棒・投石で武装して
警官隊と衝突、その放水車をうばうなど、大

衆斗争が再組織されつつある。

運動の発展に不可避のこの分裂は、左派の
ヘゲモニーの下に進行してはいるが、今後の
「自国帝国主義打倒」の中央権力斗争の中で
更に綱領的内容の明確化がせまられている。
すなわち、第一に、戦略目標としての自国帝
国主義の規定、第二にドイツの政治過程の見
通しと、ファシズム論、第三に、基礎組織と
労働組合及び前衛党の関連、そして最後に、
ヨーロッパ革命—世界革命を展望する国際
主義路線が今後の課題として残されている。

2 ぼのおの五月、そして……？

フランスの現局面

一九六八年五月三日、フランス。ド・エ
ールのしわがれ声が消えて、国歌「マルセイ
ユーズ」が、テレビのスピーカーから流れる。
そして、一月にわたった二つの祭りが、その
終りをつける。

これは、真の終りの首なのか？ それとも
ただの休止符にすぎないのか？

五月の「古典性」と「現代性」

「フランスの五月」は、世界革命史上、一種独特な出来事だったといわれねばなるまい。

その、ある意味で非常にクラシックな面は、
明確である。ほとんど都市ゲリラに近い、は
げしい対国家権力との衝突、大衆的な大規模
なデモ、国家経済全体をマヒさせる一千万労
働者の無期限ゼネ・スト、行動委員会、スト
委員会、労働者・学生評議会の結成、部分的
二重権力状態の発生……フランス共産党の、
非常にアイマイで、結局は極めて反革命的な
役割、その他社民党の示した修正主義的な
態度、そして与党のみにくいあわてふためき
これらは、正にこのような状況の下での予期
される、非常に「クラシック」な動きであつ
た。この「古典性」が、最も顕著に現れたの
は、例えば、国家権力の弾圧の方法に見られ
るだろう。パリ・コミューンの時の反革命の
大立物ティエールの「革命運動を弾圧する法
と、今回フランス五月の弾圧に見られる類似
におどろかない者はいないだろう。

しかし、それと同時に、我々は、この「フ
ランスの五月」の中に、驚ろくべき「現代性」
を見い出すにはいられない。五月十三
日の百万人のデモの中に見られた林立する黒
い旗、ソルボンヌ、オデオンの屋根に赤旗の
横にひるがる黒い旗、そしてパリゲードの
上にたてられた黒い旗……このアナキズム
の突然の出現—或は復活に、フランス市
民は驚ろきの目を見はつた。あるいは、パリ
カルチエ・ラタンの壁という壁にながら書か
れた、解放された、しかしおどろくべきほどの戦
斗性をこめた「落書き」……そして、また

「ナン・ポリをめぐめた」学生、あるいは、より一般的に「青年」たちのたじたた役割……多くのデモ、そしてほとんどすべてのパレードの上で見られた。長い髪の若者たち、そして彼らの激しい戦闘性。あるいはまた、「下町の不良」といわれた部分の「制御されない」動き。

こういったものは、たしかにこれまでの数々の革命の高揚の時に見られたもの。しかし、「フランスの五月」に見られた祭りの要素は、そのまま、忘れ去られていた現代の祭りの性格を体現している。我々は、ここに現われた「新しさ」、「新鮮さ」に注目すべきだろう。なぜなら、それらが、この「五月革命」の特殊性と「栄光と悲劇」、発展性と限界を示しているのだから。

「革命前に生きてたことのない者は、生きることのかわしきを知ることが出来ない」という、この落書きにも現われているように、五月以前のフランスには、重い圧迫感、絶望感のフニキでみちみちていた。十年間の、あてもないド・ゴール政権、極めて官僚的な行政機構、一つのレールにのつたら、一生「脱線」できない人生……こういったすべてが、ヨーロッパ共同体をめざしての移行経済の不安—不安定性—とあいまって、一見安定したかに見えるフランス社会を極めて愚かしいものにしていった。ド・ゴールがいる限り、なるようにしかならない」という一種のあきらめ、すべての根本的変革は、

五月のもたらした結果

この「五月革命」は、フランスにどんな結果をもたらしたのか？

- (1) 経済
 - (a) 「グルネルの協定」

「グルネルの協定」を基盤とした労働者への賃金引上げは、平均して70%だといわれる。

トロンクストーJ・C・Rーなどが行っていた(の)影響は、疑いなくものとして、実際の爆発が起つたのは、政治的な場というよりも、生活に密着した大学、工場あるいは地区での、すべての権威主義に対する叛逆という形態をとつたのだ。そして、そこに意識的でない大衆の爆発的な力があつたし、そこから、政治化が始められたのだ。

え、労働時間四〇時間、その他を勝ち取つたのだ。これでは、経済的要求だけをかけた修正主義的な一部の労働者にとつてきえ、勝利と呼ぶことは困難だ。この内、最低賃金の大幅な引上げ(30%)、低賃金の比較的大きな引上げは、民主的に見えるが、これは今までの法外な低賃にくらべて、単に当然のことといわねばなるまい。しかも、この大幅な引上げは、一部の中小企業にとつて、ほとんど絶望的なものであり、今までの、中小企業中心の政策から、大企業独占資本中心への移行、しいては、失業者増大を導く政策にも直結している。

- (b) ド・ゴール政府の政策

しかし、もちろん、この一月に近い経済的マズ状態は、フランス・ブルジョアジーにとつて、大きな打撃となつたことはまちがいない。これは、年間2-4%の生産低伸をきたし—これは、生産増進政策によつて、最低限におさえられるだろうが—それに加えての賃上げは、ヨーロッパ共同経済を直前にひかえているブルジョアジーにとつては、なんとんでも、とり返さねばならないものである。すでに、これに向けて、種々の政策がとられ、或はこれからとられてゆくだろう。

また第一に、物価の全般的な値上り。これは、政府が、5%以上に上らないように、厳重にコントロールするといつてはいるにもかかわらず、国営企業はほとんど率先して行つていふことである、電気、ガス、鉄道、電話

と見る向きが多かつた。ただ、これはE.E.C.内のフランスの位置、あるいはより大きく、今後の国際政治に大きく影響することなので、極めて慎重に、極秘のうちに計画されている。しかし、「五月」は、実はフランス・ブルジョアジーにとつて、困難な結果だけをもたらしたのではなく、数多くの中小企業に、その発展をさまたげられてきたフランス独占資本にとつては、「グルネルの協定」での低賃金の大幅な引上げは、実はねがつてもないことなつたのだ。これら中小企業の存在によつてのびやんでいた大企業は、「五月」によつて始めて、のきなみにつぶれてゆく小工場を前に、ゆつくりと再編成、合理化のナタをふるうことができたのだ。

しかし、それと同時に、今までより以上に大規模に起るのは、失業である。一九六八年五月には、公式発表では、約五十万の失業者がいる。これは、一九六七年にくらべると、40%の失業者人口増大である。しかも、これに加えて、約四十万の、まだ一度も職についたことがないが、職を求めている青年達、婦人達がいるといわれている。そして、七月ごろの、ある政府の非公式の調査によれば、来年には、「公認失業者」が、百万以上になる可能性が指摘されている。これに、「非公認失業者」60万をたせば、フランスの全労働人口千六百万の10%をしめることになる。もちろん、これは悲観的な予想だとしても、一九六九年には、これに近い結果が出るにちがいない。

- (2) 「社会」
 - (a) 労働者

フランス政府は、一九六九年度に、7%の経済成長を予想しているが、工作機械等の工業が非常におかれているフランスでは—工作機械の44%、そして会計機械のほとんどすべてを、輸入にたよつてい—その程度の経済成長では、この失業者人口を吸ひこむことは、不可能であろう。いや、逆に、独占資本の再編成、合理化が進む課程で、失業者人口は、ますますふえてゆく一方である。見てまがいない。ということでは、この経済拡大政策の中にも、フランスは、社会不安、そして政治危機の要因を、先行的にふくんでいるということなのだ。

「フランスの五月」は、それを斗つた者にとつて、どんな結果をもたらしたか？

まず、労働者の大部分をしめる中年、或は老年労働者に関して—非常に大きくつば—いえることは、全般的な、落胆のフニキであらう。彼らの一部には、一九三六年の人民戦線の時代を思い出している者もあるだろう。彼らは、一月にわたる激しい斗争も、それだけではなんら根本的な変革もたらさなかつたのだ。二度も、二度も、これ以上のことはもうできない、という落胆におち入つてしまつていふのだ。「結局、なんにもならなかつたじゃないか」といふのが、彼らの結

郵便などは、一斉に値上げを行う。しかし、もちろん、そこには、E.E.C.のワクの中で、特に重工業—自動車、機械類など—での、大幅な値上げが不可能なという客観的な条件がある。にもかかわらず、値上げが5%以内にとどまるのは、非常に疑がわしいことである。もちろん、これが政府の意識的なインフレーション政策であることは、いうまでもない。そのほか、日用品の値上げも、目立つてきている(パン、タバコ等)

それに加えて、一九六九年度の予算は、すべて五月にブルジョアジーが手はなさねばならなかつたものを、取り返す目的で組まれている。まず、税の大幅な引上げ(一億二千万フラン)によつて、人民の所得が吸ひ上げられる。それと同時に、この巨大予算(一九六八年度に比べ、約16%の増大)は、また巨大な赤字予算でもある。というのは、この予算の非常に大きな部分(約五十万フラン)が、そつくりそのまま、フランス・ブルジョアジーのポケットへ流れこむように計算されているのだ。つまり、大規模な、独占資本の助成金によつて、フランス産業を、E.E.C.内で、競争圏内にとどめようという政策なのだ。

この物価値上げ、あるいは予算でも、五月のショックからの立ち直りに十分でないなら、もちろん、最後の手段として、フラン切下げが考えられている。すでに、六月中旬から、このフランの切下げは、不可避のものだ。

五月において、急速な政治化をとげた彼らは、現在、なるほど表面的な動きはしめしていないが、しかし、ちやかくちやかくみすからの組織化を急いでいる。その一部は、行動委員会という形の組織に、あるいはM.L.派の影響を受けている一部—「プロレタリアC.G.T」という形の組織に身をおいて、来るべき斗争に準備しているのだ。これら諸組織は、六月中旬にくらべて、その人員は減つたかもしれない。しかし、六月以来の厳しい時期を乗りこえてきた彼らは、多くの討論、経験を経て、五月以前とはくら

へものならぬほど、成長してきている。

(b) 学生

では、学生連の状況はどうか？ まず第一にはつきりさせておかねばならないことがある。五月での、学生連の役割について、よここまかい分析をしなければいけないのだ。つまり、一もろんのことながら一学生がみんな革命的だというのは、まちがっているのだ。五月では、ほとんどすべての学生が、闘いのウズの中にまぎこまれた。しかし、そのうち、何人が実際にバリケード上でたたかっただか……？ 実際には、バリケード上でたたかっただかには、実は、学生は半数以下しかいなかったらう。その他の人は、個人的にデモに参加してきていた青年労働者、或は、いわゆる「街のチンピラ」と呼ばれているような若者、そして、一部のヒッピー達だったのだ。

ここで、はつきりするるのは、大部分の学生は、真の闘いには参加しなかったということ、闘いに参加したのは、以前から高度に政治化されていた部分と、それにならなく自然発生的に「集つてきた」少数の学生だったということ、そして、少々の政治的知識を持つていた部分は、逆に、修正主義的な動き——大学「改革」案の作製等——を示したことがある。もちろん、五月の間に、「自身に深く関係した」闘いの中で、多くの一般学生が、急速な政治化をとげたのは、疑いのない事実だ。

こうした、政治化された一般学生の一部は、J.C.R.、M.L.諸派などの隊列に加わつていったし、まったく自然発生的に闘いに参加した部分も、どちらかといえば、アナキスト・グループの中に入つていった。しかし、こうした、最も戦斗的に闘つたノン・ポリの一部は、革命的状況が消え去ると同時に、運動の表面からは姿を消してしまつた。そして、一特に、フオール文相の改革案が出てくると一一般学生は、全体的に修正主義的色彩あいをこめていく。

しかし、状況は、もちろん五月以前とは大きく変つてきている。トロツキストや、M.L.派、そしてアナキスト・グループの大部分と歩調をあわせた学生は、現在、大学内で、また地区的に、行動委員会の中に自らを組織化している。J.C.R.や、M.L.諸派は、非合法化以後、行動委員会の形をとつて、存在しつづけているのだ。

また、五月中の大規模な政治化により、ほとんどすべての学生が、一定の政治的立場を持たずにはいられなくなつてきている。完全に無関心でいるということが、そのまま意識的な政治的立場を示すような状況が生れてくるのだ。こうした状況の下では、リベラリズムや、妥協的な修正主義は、しだいにその本質を暴露せざるを得ないだらう。

(c) 「世論」

しかし、より一般的に、フランス全体としての「世論」を見るならば、そこ一つのア

キラメも見えない。政治的無関心、それともなう大きな右翼化を見い出さねばならない。それは、すでに六月の選挙でも現われているし、また、「市民行動委員会」、「共和国防衛委員会」等の、フアンシヨ的な組織の出現にも現われている。この一種のアキラメは、政府、既成政党の政策だけに原因があるのではなく、新鮮さをすでに失い、商業化され、一特に戦術面で——一種のマンネリズムを呈示している「五月運動」にも、一つの原因があるのではないかと思われる。

人々は、「マイ・ホーム主義」的な小さな幸福を追うことだけでせいじつばいであり、そこには、一時の満足か、さもなければ小さな経済的要求——あるいは不安以外のなにことも見い出せない。それは、まるで五月がなかつたようたともいえるような状況だ。五月で起つたことが、あまりにも都市に集中していき、大部分の農村では大きな影響が見られなかつた、ということもできるだらう。しかし、それについても五月一それに対する大きな希望と、大きな恐怖——はあつたのだし、それは依然として、労働者——学生行動委員会対共和国防衛委員会という形ですりつづけている。

五月を経験し、革命勢力対反革命勢力の斗争を目的たりにし、そしてなんらかの形でそれまぎこまれていながら、かたくなに政治に対して無関心を示している彼ら

には、根本的な不自然さがある。そして、そこに来るべき闘いの、原動力があるのかもしれない。

(3) 政治

(a) 右翼

六月末の選挙を契機として、フランスの政治には、大きな変化が現われてきた。世論全体の大きな右翼化にともなつて、ドゴール派政党U.D.R.が二四四から三五八議席へと大きく躍進する。それは、全体的な右翼化であると同時に、ドゴール派内部の分裂を強めるものである。ポンピドゥ、ブジヤドに代表されるドゴール派右派に対抗して、カピタン、フオールに代表される左派が登場する。ドゴールは、中間派のテクノクラート、クーヴ・ド・ミユルヴィルを、ポンピドゥととりかえて、両派の調整をはかろうとする。もちろん、フアンシスト、ブジヤドと、リベラリスト、カピタンの間に、本質的な相違がまつたかないことは、いまでもない。この二重性が、ドゴール政治の性格を非常に適格に現わしているのだ——つまり「ニンジンと棒」政策とした。

それは、一五月のスト中に、ストによる処分はなされない、という約束があたえられたにもかかわらず——スト後、すくさま大量の首切りが行われたのと時を同じくして、「参加」というニンジンをちらつかせる政策にも現われている。あるいは、それがもつとも願

著に——ほとんどマンガ的に——はつきりしたのは、私服警官の監視の下に行われた「リベラル」な医学部の試験だらう。

しかし、この両刃の剣であるふくれ上つたU.D.R.は、その両極端の先鋭化のため、一表面的にはもちろんのこと——実際に分裂を深めており、大きな危機があつた場合(あるいは、ドゴールがいなくなつた場合)、完全に分裂してしまひ、二つの党を形成してしまつ可能性も内にふくんでゐる。

(b) 左翼

左翼の既成政党は、一労働者に、深い基礎を持つていけるフランス共産党P.C.F.をのぞけば——ほとんど解体の危機に類しているといつていい。中間派の「現代民主党P.D.M.」にしても、社民右派的な性格を持つ「民主社会主義左翼連合F.G.D.S.」にしても、すでに、ほとんど発言力を失つたと見てもかまわないだらう。

社民左派で、五月においてP.C.F.より左翼的な傾向を示した「統一社会党P.S.U.」は、議会では、ついに一つの議席もなくなつたが、一部のインテリゲンチヤ学生の中で、相当な発言力を持つていける。特に、フランス全学連U.N.E.F.の指導部に対する彼らの影響力は、大きいものといつていい。シヤンク、ソウヴァジヨは、P.S.U.党員である(セルジュ・マド)をも、P.S.U.のイデオログの一人と考えられている。しかし、彼らは、党員

個人個人としては、一定の理論を持つていても、党としての理論は、非常にアイマイなものである。P.S.U.について、特筆しておかなければならないのは、一つは、C.G.T.の次に大きいC.F.D.T.が、彼らに近い態度を取つていること——特に、五月では、経済的要求だけを主にかかけたC.G.T.に反し、組合の自由、労働者の経営への参加、そして自主管理をスローガンにしたし、もう一つは、特に、学生を中心にして、行動委員会の形態を持つ組織を持つていことだらう。また、極左組織の非合法化に際して

はつきりと非難の態度を示したのも、既成政党としては、P.S.U.だけだつた。

P.C.F.は、五月以来、その組織の根柢から、大きくゆり動かされてきた。彼らにとつては、ほとんどすべてが、予期できないうへばかりだつた。彼らにできた唯一のことは、C.G.T.などを中心にした大きな動員力を使つて、革命を裏切ることだけだつた。その裏切りは、それ自体としては成功したかも知れない。しかし、P.C.F.は、この悪辣な裏切りによつて、その本質的な性格を完全に暴露してしまつたのだ。五月を契機に、

フランスでは、P.C.に対するすべての幻想があり得なくなつてしまつた。それは、P.C.の完全な老化を現わすものだ。そして、その結果は、六月の選挙にも、明確に見い出される。

それにもかかわらず、なおかつP.C.F.が一定の発言力を保つていけるのは、前にも述べたように、C.G.T.を通じて、一部の労働者に根強い影響力を持つていからからだ。しかし、その影響力の質自体が、五月以後には、非常に變つてきていると思われる。というのは、五月以前には、またP.C.に一定の幻想を持つていた部分が、完全に幻滅し、それでも、「党」の影響下にある人々の唯一の理由は、前にも述べたような、深いアキラメの気持だからだ。しかし、ここで一つ、つけ加えなければならぬことがある。五月中旬に、C.G.T.に、四〇〇五〇万の労働者が、新しく組合員になつたのだが、その80%は、二五才以下の青年労働者で、五月のストを、より固い団結を持つて闘おうという意識にもえたものが非常に多かつた——それは、この組合加入が、ほとんど五月初旬に大量に行われたことを見ても明確である。ストの間彼らは一貫してC.G.T.指導部に批判的だつた。彼らの一部は、五月中、或はそれ以後、C.G.T.組合員であることをやめないうまで——行動委員会や、プロレタリアC.G.T.の活動家になつていつただらう。また、そういった極左組織に加わらな



また、C.G.T.の「体質」を、その基盤から変革してどうしようとするか、多分、アナルコ・ナンディカの一面を持っているよう

に思われる。とがらにしても、C.G.T.の人数がふえたからといって、そのままC.F.が勢力をばしていると理解するのは、あやういのだ。

チエコ事件の影響

影響

(1) P.C.F.

このP.C.F.にとって、今年はまさに多難な年だった。五月で受けた、ほとんど致命的な打撃から、やっと立ち直りかけたばかりのとき、チエコ事件が勃発したのだから、四十年来、常にソ連路線に従順にしながら生きてきたP.C.F.が、一そのスターリニストの性格をまったく変えないまま、ソ連のチエコ侵入を非難するはなかつたということ、そのままた、P.C.F.の危機の深さを物語っている。しかし、このソ連のチエコ侵入は、党内の「進歩的」なインテリに、実際大きなショックを与えた。

ロジェ・ガロディ・ルイ・アラゴン、ビエール・シヤカンを中心とするこれらのインテリは、この事件で、大きな動揺を示す。何十

年の忠誠をかかっていた彼らは、一特にアラゴンなどの一ほとんどセンチメンタルなリベリズムを強く刺激されて、ついにソ連に叛逆の態度を示すようになる。この動きは、党主流のスターリニストが、五、六月以後の国内状況から、リベラルなポーズをとらなければならなかつたのとは、根本的に相違がある。これらのリベリストは、今後、思想的には、P.S.U.に近ずいて行くだろう。

P.C.F.内部には、これまでも、いくらか分裂の気配があつたが、チエコ事件は、それを決定的なものにする契機になるかもしれない。

(2) 新左翼

フランス新左翼の各派のチエコ事件に対す

の存在であつた。そして、もう一つは、ドゴール政府の最初の攻勢が、フォール改革案という形をとって現われることである。

それは、九月中旬の「ルージユ」の出したいる方針を見ても明らかである。

(1) 試験斗争

秋の斗争の「第一ラウンド」は、九月、十月の試験斗争として斗われる。そのために、二つのこととなった方針が明らかである。一つは、試験の完全なポイコント、もう一つは、集団的カンニングによる試験の妨害である。多くの行動委員会で、この斗争の意義と内容を説明するため、活発なプロパガンダ活動を行う。

しかし、その反面、政府側の攻撃も激しい。すべてのマス・コミが動員されて、フォール改革案の進捗性を強調する。U.D.R.の中のウルトラ右翼が、フォールのリベリズムを激しく非難するポーズを取る。経済の問題、労働者の問題は、大学問題のカゲにかくされてしまう。こうして、政府ブルジョアジイは、「五月」の真の意味をさすり変えてしまおうとする。大学内の修正主義的部分の好意を買って、革命勢力を孤立させようという策謀が、強力におし進められる。そしてそれと同時に、国家権力の弾圧は、ますます激しくなつてゆく。アララン・クリウインは、四週間以上の牢獄から出されて、一週間の休暇の後、ただちに軍隊に召集される。カルチ

の反応については、またくわしい資料が入っていないので、こまかくのべることはきげう。ただ、非常に大きければ、J.C.R.は、非法化後の新しい機関紙「ルージユ(赤)」の、九月十八日付創刊号の中で、チエコ事件の分析をのせている。その中で、注目にあたっているのは、カストロのチエコ問題に関する演説の批判だろう。「ルージユ」は、このカストロ演説を、論理的な矛盾と経験主義だとして批判している。また、J.C.R.の指導者ラン・クリウインは、あるインタビューの中で、北ベトナムとキューバのチエコ事件に対する態度を批判して、それはスターリニズムの分析が不徹底だからだという結論を出している。

M.L.派のチエコ問題に関する見解の資料は、まったく入っていないので、ここでは言及をさげよう。ただ、一つだけいえることは、フランスのM.L.派の性格からいって、

秋の斗争の現状

現状

さて、この秋のフランス新左翼の斗争の現状は、どうなっているのだろうか？

この秋の斗争の第一波は、学園斗争として

高校(リセ)で行われている非常に活発な斗争だ。五月では、高校生たちは、ほとんど大學生以上の戦闘性を示して斗った。フランスの高校は、改革が行われた現在でも、おどろくほど封建的機構を持っている。だから、彼らは、高校生の学校運営への参加、高校での政治的自由、学校の外界への開放などをスローガンにかけて、大規模なストなどを行って斗争を続けている。

こういつた、表面に現われる斗争と同時に、行動委員会の形をかりた組織化が、活発に行われているだろう。

(3) 「ルージユ」の方針

ここで、「ルージユ」が、九月現在に出している方針を、簡単に紹介しておこう。まず、一つの大きな原則として、五月で勝ちとつたものを守り、拡張しなければならない、ということ。五月で勝ちとつたものは、一もちろん、フォール改革案だけではなく、主に学生の政治化と行動委員会という形の組織

その見解は、中国の公式見解とほとんど変わらないだろうということである。

チエコ問題に関して、フランス新左翼の分析として興味深いのは、五月、戦闘が最も激しかった頃、活動家自身が出した新聞「アクション」が、七月に出した分析である。その分析は、特にチエコ経済分析を中心にして行われていて、その結論のなかで、ドブチエク一派を、テクノクラティックなリベリストとして批判している。彼らは、すでにソ連のチエコ侵入を予期している。その分析は、ドイツ新左翼の「ウァス・トウーン」派の分析とも非常に近い点でも興味深いものである。また、チエコ事件の結果として、のべておかなければならないもう一つのこと、ドゴールの共産圏に対する経済的接近の政策が、この事件で痛烈な一撃をくらつたことである。

斗われてきた。そこには、もちろん一つの必然性がある。それは、まず前にも述べたように、学生の比較的大きな戦闘性と、強い組織の出現である。だから、まず第一の方針としては、行動委員会の拡張と、それによるプロパガンダ活動が上げられる。

それと同時に、フォール改革案のワケを大きくふみこえた、学内の政治的自由を確立させること、そして、この改革案のギマン性を暴露すること。試験斗争に関しては、「ルージユ」は、試験ポイコントを、極左冒険主義的だと批判した後、集団的カンニングなどによる試験妨害の方針を提起している。

最後に、「ルージユ」は、「我々は、プロレタリア前衛のショック部隊である」として、「赤い大学を」というスローガンで結んでいる。

しかし、こうしたすべての秋の斗争を見て、一つの大きな弱点は、その斗争が一つのまとまったものになり得ない点である。それは、外部的にみれば、マス・コミなどを通じての分裂作戦の結果でもあるが、内部的には、五月以後の組織の問題でもあるだろう。

新左翼内の論争

論争

では、これらの斗争を通じて、フランス新

左翼内では、どんな討論がたたかわされてい

るものだろうか。

しかし、その内容を分析する前に、一つの条件を頭に入れておかなければならぬ。つまり、フランス新左翼にとつて、五月の闘いは、また決して終つていないのだ。少なくとも、十月中旬現在。そうした判断に基づいて、彼らは、また「五月」の「自己批判」をも包んだ「根本的な総括」を行つていないのだ。だから、おのずからその討論の内容自体、戦術的な次元のものが多く、根本的な問題をふくんだ討論は、また表面的にはなされてない。しかし、こうした条件の中でも、重要な問題をふくんだ討論が、少しずつははじめている。

こうした討論で、特に興味深いものは、多くの場合、五月以前からあつた理論と、五月中、或はそれ以後に新しく生れてきた理論という形で出て来られている。もちろん、この五月以後の理論には、いまだ大きなハンデイクンツがある。特に、経験のたりなさという点で。それは、また理論と呼べるほどのものではなく、たゞいくつかの問題意識をいつた方が、正確かもしれない。

一 ついつた条件の下で、この分析は正確なものにはなり得ないが、これらの比較的重要な問題をふくんだ討論を少し紹介してみよう。

(1) 労働者と学生の連帯 — 革命主体の問題 —

まず第一に、学生と労働者の連帯の問題、学生は、革命の中でどんな位置をしめるのかというところ、いかえれば、誰が、誰のために革命をするか、という問題である。これは、もう一つのいい方では、革命主体の問題といつてもいいだろう。

この問題に関して、M・L・派の見解は、あまりである。M・L・派の中の、特に「共産主義青年同盟マルクス主義グループ」派（U・J・C・M・L）は、彼らにとつて、革命は、労働者・農民が、労働者・農民のために行つたものである。だから、極言すれば、学生は、革命の中でなんの役割も持たない。ソルボンヌ占拠の際も、彼らは「いまこそ工場へ」といつたスローガンをかけて闘つた。

それは、バリケード戦の時の彼らの戦術でも明確である。彼らは、これらのバリケード戦が、真に労働者・農民のものであるというより、いまだ学生のものであるという性格が強いとして、この闘いに、組織的には参加しなかつた。個人的には、もちろん参加したのだが、また、もう一つの例としては、大学を卒業したU・J・C・M・Lの活動家の一部は、工場に労働者として就職し、その工場の労働者大衆を内部から政治化し、組織してつこうとする。

トロツキストに関しては、その原則的な立場は、学生は、大学内の斗争を通して革命的前進になることができるといふものだ。(L・L・P)トロツキストの場合には、

すべて、第四インター・統一書記局派、あるいは、その下部組織であるJ・C・Rをさす。それ以後にも、パプロ派の組織の「革命的學生同盟」(F・E・R)、「労働者の声」(V・O)などがあるが、統一書記局派に比べると、極めて影響力が小さいので、ここでは特に言及しないことにする(もちろん、この原則には、「革命は、労働者が、労働者のためにする」という大前提がある。彼らにとつては、五月の闘い、特に、三日から十三日の、ソルボンヌ解放斗争、そして、それにつづけて学生運動の勃発は、この基本的態度の正しさを証明するものだった。彼らは、決して労働者への呼びかけ、接近をおこなつたのではないが、まず第一にソルボンヌ解放斗争を、階級斗争として位置づけ、それに全力をあげてつたのだ。ここで、もう一つ注意しておかなければならないのは、この傾向を持つていたのは、J・C・Rだけでなく、この斗争中、特に初期に、最も指導的役割をはたした三月三日運動の大部分も、そうだったといふことだ。

しかし、五月中、或はそれ以後生れて来たいくつかの、多分にアナキーな性格を持つ一傾向の中には、この考えとはことなつたものも出てきている。(ただし、こうした傾向の人々は、また独自の組織を持つてゐるわけではない。あるとすれば、いくつかの行動委員会だけだ。)

彼らにとつて問題なのは、資本主義的な生

産関係より以上に、支配と被支配の関係、あるいは、決定権を持つ者、持たざる者の関係なのだ。こうした基礎を持つ傾向の主張者にとつては、おのずから、労働者と学生の間、根本的な相違はなくなつてしまつた。だから、彼らにとつては、学生の闘いは、そのまま労働者の闘いであり、労働者の闘いは、そのまま学生の闘いになり得るのだ。極端にいえば、これらの闘いは、すべて「人間の闘い」に還元されるのだから。

彼らにとつては、「階級」という概念も、たとえ、それを認めたとしても、もちろん意味がなくなつてくる。

こうした傾向があらわれる必然性が、たしかに、フランス社会の中にあつたように思われる。それは、まず第一に、すべての分野での極度に発達した官僚主義であり、体制内化し、腐敗した組合、共産党であり、そして社会全体の重苦しいアキラメと絶望のフニキだった。そして、その中から、「他人のことを考えるな。でないと、他人がおまえのことを考えてくれないぞ」とか「オレは誰のために闘つているのでもない。人民は、みすからで解放するだろう」といふことが生れてくるのだ。

(2) 組織論

もう一つの重要な問題は、党の問題—— 主要組織論だろう。

(a) プロレタリアC・G・Tについて

M・L派については、それは、まず「プロレタリアC・G・T」という組織を、党の出発点として見てみる。このプロレタリアC・G・Tとは、C・G・T内部に作られ、その組織構造をかなりながら、基礎から、C・G・Tの修正主義的、官僚的性格を變革してつこうとするものである。だから、これを一種の加入戦術と見ることもまちがいではないと思われる。それと同時に、M・L派が特に力をそいでいるのは、プロバガンダの点である。その一つの例としては、「長い歩み」戦術がある。それは安泰以前、日本で行われた「帰郷運動」とほとんど同じ内容のもりたどつていい。そして、これを見てわかるように、農民に対して、積極的にプロバガンダ、政治化活動を行つてゐるのは、ほとんどM・L派だけである。

M・L派のプロレタリアC・G・Tに対し、トロツキストは、行動委員会に特に力をそいでいる。行動委員会は、全体としては、非常に多種多様で、複雑な性格を持つてゐる。で、ここでは、その内容を規定することはできない。

(b) 行動委員会について

ここで行動委員会について、若干説明しておこう。この種の組織は、五月三日、カルチエ・ラタンで始めの闘いがくりひろげられると同時に、まったく自然発生的に生れてくる。それは、四、五人から、十人前後(場合

によっては三、四人ほどの小さなグループで、まず始めは、活動家の政治討論の場としてある。しかし、斗争が発展すると同時に、急速に政治的な責任を持ちはじめ、独自の組織としての行動をとれるまでに発展してゆく。行動委員会は、原則的な組織で、しかし、一定の区域に、いくつかあつてもかまわない、むしろあつてはよい。その最も基本的な活動は、プロバガンダである。また、地区的な組織とつても、一つの工場のなかにあつてもよい。また大学、学部内にあつてもよい。

五月の斗争のあいだに、それは急速に数をあやしつつ、大きな役割をはたしてつた。まず、地区の政治化から始まり、ストライキの支援、地区行政機関の建物占拠、集会、デモなどの組織、報道のコントロール、物価のコントロールなどを行つた。

その間、新左翼各組織のあいだで、行動委員会のヘゲモニー確保のための、激しい闘いがあつた。その中で、一番大きな成功をしたのが、J・C・Rだったことは、疑いない。しかし、そのJ・C・Rでも、多くの行動委員会すべてを集約しきれたとは、いえないだろう。

これらの行動委員会は、極左組織の非合法化以後、新しい役目をはたすようになる。というのは、非合法化された組織が、その後地下で活動をつつていくためには、行動委員会ほどよくいかな場所をはなつたからだ。

トロツキストは、この行動委員会を、将来の党の出発点とみなし、その拡大と集約に全力をそいでいるのだ。

(c) 三月二日運動の理論

しかし、これらの行動委員会の集約が、非常にむずかしい理由の一つに、激しい反官僚主義があげられる。一部のアナキスト——特に、コーン・ペンデイトを中心にしたグループは、レーニン主義的な党、前衛それ自体に大きな疑問を持つてゐる。彼らにとつては、党は、そのまま官僚主義に直結したものと受け入れられてゐるのだ。党、前衛の目的意識性に対し、彼らは大衆の自然発生性を主張し、みすからをその大衆の中の「活動する少数派」とみなしているのだ。そして、実際、この考えを具体化したものとして、三月二日運動が作られてつた。三月二日運動は、一つの綱領を中心にした党ではなく、これらの「活動する少数派」の集団としての「運動」なのだ。だから、そこには一人の指導者もないし、それに加入するには

ただ自分で、「自分は、三月二日運動に加わつてゐる」といふだけで十分なのだ。それだから、三月二日運動には、すべての傾向—— M・L派からアナキストまで——の活動家がふくまれていた。五月以後結成されてつた行動委員会は、ある意味で三月二日運動の一つの発展した形態と見なされてもいさうだろう。

三月二日運動自体は、コーン・ペンデイトが西ドイツへ追放され、非合法化されたのち、ほとんどその姿を消してしまつたようだった。しかし、依然として多くの行動委員会が存在しつづけ、しかもトロツキストによつて完全に集約され得ない現状は、三月二日運動の組織論が、また消え去つていない証拠だと見なすこともできるだろう。

しかし、行動委員会が、その連絡委員会を通じてさえ、一定の方向性を持った行動を起し得ないというところは、これらの組織論が、またまた完全なものではないことを示しているように思われる。

展 望

(1) ドゴールの基本的戦略

一九五八年、ドゴールが政権を取り、アルジェリア戦争が終結して以来、ドゴール政権

は、一貫して二つの戦略に基づいて、種々の政策を押し進めていた。その一つは、ブルジョアをはじめとした旧植民地を、ネオ・コロニアリズムでもって搾取しつづけること、もう一つは、E・E・Cを通じて、ヨーロッパでの政治的ヘゲモニーをとり、アメリカに對抗していくことである。

そのために、国内的にさまざまな政策が取られてきた。まず、大統領の権限を、ほとんど無制限にすること、だから、フランスでは、ブルジョア議会主義は、どのみちほとんど意味を持つていなかった。そして、行政機関の中央集権化と、官僚制を徹底させること。自国の軍備を拡張すること。そして、フランスの経済力は、常に三つのことに使われてきた。まず第一は、金のためとみ政策。これは、農業国から工業国への切りかえにたちおくれ、西ドイツに比べてずっと低い生産力を、金によってカバーし、フランスの安定性を得るための手段だった。もう一つは、精密機械、化学工業、自動車工業などの、先端を行く、外国に高く売りつけられる産業に対する援助。これによって、おいてきぼりにされた産業—繊維工業、鉄工業、農業など—は、ますます困難な状況におさまれる。独占資本と、中小企業とのギャップがひろがつてゆく。大企業の合理化と、中小企業の倒産は、当然大量の失業者を生み出す。そして、最後に、アフリカを中心とした第三世界に対する「援助」がある。

対外的には、イギリスのE・B・C加盟に対するポイコント。それは、一つはE・E・C内でのヘゲモニーを貫徹させるためだし、もう一つは、アングロ・サクソン系のポンド下、いいてはドルに対するいやがらせでもある。そして、共産圏諸国に対する経済的接近。また、N・A・T・Oからの脱退。

しかし、こうしたすべての政策の中には、大きな矛盾がたくさんある。その最も大きなものは、経済的には、西ドイツに決定的にたちおかれているにもかかわらず、E・E・C内でのヘゲモニーを貫徹しなければならぬことである。

こうした政策によって—比較的小規模ではあるが—経済成長が行われる。それにもかかわらず、賃金はさつぱりのびない。そして、経済成長にともなう、物価が値上がりする。労働者の生活条件は、ますます悪化する一方だ。

また、ほとんど封建的な官僚主義の徹底により、社会の近代化は、まったくおこなれない。こうした中で、多くの青年失業者の問題、あるいは、青年の職的不安定性の問題、また、帝国主義的な再編を必要とする大衆問題が、急速に重大になってくる。

(2) 五月の爆発とフラン 危機

五月の爆発は、こうした状況の下で、起つたのだ。しかし、この爆発は、ある意味で、ブルジョアジーにとつてまったくつづ

よく取りまとめられてしまった。つまり、これを機会に、ブルジョアジーは、「ゼロからやりなおす」ことができたからだ。

まず、大企業の近代化、合理化。これは、「参加」という美名の下で行われるはずだった。それからリベラルなフォール改革家にもとずいて行われる大学の再編、革命的左翼の孤立化と無力化。そして、「五月の損害を取りもどさなければいけない」というスローガンの下に、「買わない、売らない」の大宣伝。来年は、七・一〇の成長という「輝かしい未来」……そのためには、税も上げ、物価も上げるが、ガマンしなさい……

そして、その裏で、ちやくちやくと強化される「反共和国分子」への弾圧。国民の自発性の中から、フランスを見い出そうという「市民行動委員会」や「共和国防衛委員会」という黒シヤン組織の出現。

しかし、「五月」には、予期しなかった伏兵がいた—ブルジョアジーの中に……それは、ドゴールのいう「いやらしい投機家たち」だった。もちろん、この大規模なフランの流出を、すべて「五月」の責任にするのは、ドゴールが、今後ますます弾圧をきびくするのための、意識的なデマゴギーにすぎない。しかし、帝国主義の国際通貨制度に、痛烈な一撃を与えた責任の一端は、フランス新左翼・革命勢力が、誇りをもつて負つた。来年度予算の赤字を半減させるを得なくなったフランス・ブルジョアジー、インフレ政

策から、デフレ政策に切りかえざるを得なくなったフランス・ブルジョアジー、西ドイツに、経済的だけでなく、政治的ヘゲモニーをえとられかけているフランス・ブルジョアジー、チエコ事件以来、共産圏への進出を断念せざるを得なくなったフランス・ブルジョアジー、シヨノンに救援の叫びをあげるフランス・ブルジョアジー……

五月「を革命的に斗つたフランス人民に対して、自腹を償つてくれ」とたのもフランス・ブルジョアジー、今度のデフレ政策は、フランスの革命的左翼にとつて、一つの大きな試金石になるだろう。

(3) 国際主義

そして、ニクソンのヨーロッパ政策、西ドイツの今後のE・E・C政策によって、ふたたびN・A・T・Oへの加入が問題になる可能性のあるフランスでは、革命のためより一層力強い国際主義が必要になってくるだろう。

それは、まずヨーロッパ各国—特に、西ドイツ、イタリア、そしてスペイン—の革命勢力と、固いスクラムをくむことから始まる。

そして、もう一度、第三世界に新しい目を向けなければならない。フランスの旧植民地が、現在右翼化しつつあり、そしていまもつて搾取されつづけていること、これは、実は

フランスの左翼の責任でもあるのだ。そして、ベトナム戦争自体、ひとつ「ではないのだ。そこで、フランスの新左翼は、あらたに人種主義を見おさなければならぬだろう。そして、また、グアデルプなどでもえ上つている植民地解放斗争と、強く連携してゆかなくてはならない。

フランスの革命的左翼が、その面盾に、なつて責任は重い。しかし、「五月」は、暗くとされてきた、ドゴール政権十年のトピラを大きくたたきやぶり、希望への大きな道をひらいた。

搾取と弾圧、弾圧と裏切りに対する怒りが、腹の底でうすまいてる限り、それはまたもや街頭で爆発し、石と火煙の雨がふるだろう。都市ゲリラの風が吹きまくるだろう。フランスでもまた、革命は語られるのではなく、すでに行われる—否、行うものになつていくのだ。

八・三国際反戦会議で確認された、国際的連帯にもとずき、我々は叫ばなければならぬ、「全世界の反革命・帝国主義に対し、革命的国際主義の旗の下、ありとあらゆるところで、斗いの銃を取れ！」

後記 この文章を書いているあいだに、フラン危機が表面化し、ドゴールはついでインフレ政策からデフレ政策への百八十度転換を行った。だから、この文章の最初の方の経済分析は、正確でなくなつた部分がある。

多い。しかし、筆者は、それを改めて書きなおす必要もないと思う。というのは、現在（十一月中旬）までの経済政策については、一応これで正しいわけだし、今後のデ



3

アメリカの現局面

とは、フランス階級斗争の今後の発展を見ながら、結論を出すべきだと思う。

の政治的うつづけを、先ず試みる。

伝統的に、シヨン・バーチ・ソサエティ等極右団体が強い影響力を持つアメリカ空軍出身のルメイと組んだウォレスが、南部白人、ヨーロッパ系少数民族、郊外の「中間層」、プア・ホワイト、肉体労働者といった層の中に、最後まで相当に強い支持を持っていたということこそ重要である。選挙当時には、ウォレス支持率は全国で約一四%であり、その中でも労働者の約一八%を占めたが、九月中旬には、全国平均で二〇%をこえる支持率があった。露骨な人種主義者ウォレス、警察州といわれる南部アラバマの独裁者ウォレスは、ベトナムという「後進小国」に対するアメリカ帝国の敗北という事態の中で、革命に

ニクソン後の展望



アメリカで、一九六〇年代が終りをつけようとしている。帝国主義世界の危機は、ベトナムに於ける「第三世界」の勝利、帝国主義諸国間の矛盾の露呈、そして帝国主義本國に於ける矛盾の内的進向と、帝国主義の「左翼的」補完物である種々の官僚主義的「前衛組織」のデカダンスといつたかたちで、全世界

的にあらわれている。帝国主義世界のたゞ中でこれを否定し、これを革命する「ニュー・レフト」もまた、新たな質的飛躍を、迫られている。

ニクソンの当選は、アメリカ社会の深刻な挫折の一局面である。この背景に、「フランス・ウォレスへの異常な支持があつたこと

対する殆ど非条理的恐怖と、既成の「政治家」への不信と、白人社会底辺にあるものの、歪められた激しい人種主義と、未来への絶望とにうらみつけられた、カリスマの希望を強く持つているアメリカの「中間層」及び白人の下層部によって支持されたのだ。

△ニクソン当選の経済的背景▽

その第一は、六〇年初期から進められた、「グレート・ソサエティ」または「ニュー・フロンティア」または「ニュー・フロンティア」の各の下での経済構造の変動である。これは、労働組合、農民等、巨大なプレッシャー・グループを体別内化し「中間層化」することに成功したニュー・デール政策の一つの必然の結果として出て来たところの、五千万以上ものぼるといわれる「貧困層」が、アメリカ社会のよきととして或いはまた、「社会不安」の要因、大都市の腐朽の要因としてあらわれてきたことに対処しようとするものだった。アパラチアの炭坑労働者等の「底層労働者、有色人種その他各種の「敗残者」を、断固として「中間層」の世界からシャット・アウトすることを目的にした「福祉国家」が、ますます発展する社会の官僚化と、産業のサイバネティクス化、オートメ化を迎える中で、こうした「アウト

の問題に対処することをいよいよ困難にしていく。即ち我々は、アメリカに於ける社会的分裂が、これまでにない形で進行しようとしているのを見ようとしているのだ。

ハンフリーのブルジョア的、偽まんの態度にもかかわらず、黒人の投票者の九〇%近くが彼に投票したことは、ニクソンに対する反対の方向が、黒人層の中で圧倒的であったことを裏しける。

△「ニクソン支持層」とは▽

では、ニクソンの支持層であるアメリカ中間層といふものの、政治的内容は何なのか？これに関しては、リベレイション・ニュース・サービシ誌十一月十三日号に、ガーディアン紙から転載された「レスタターの論文の一部を引用しよう。

「……それはアメリカ中間階級、ピュリタン・モラルを持ち、真じめ一徹の退屈な生活を送る人々だ……都市と郊外の中間に住む人々、真四角な髪生を毎土曜日の朝にかりこみ、毎土曜の午後自動車を水洗いし、毎土曜の夜ドライブ・アウトに出かけるアメリカ中間階級、彼らの世界は、この体制を信する人々の尊敬すべき世界だ。体制は、彼らの為に役立つて来たのだ。

リチャード・ハント・ニクソン、スベロト・シユナイ、アグニエー、この世界の典型的な代表である。彼らはいずれも貧しい環境をのりこえる為に、あくせく働いて努力して

サイダー」の部分が、初めて資本家国家の将来にとって深刻な問題として取り上げられたのが、すなわち「貧困に対する戦争」であった。非生産的、非流動的人口を労働人口の中に再編入することは、資本家にとつての重要な課題なのだ。これは必然的に中間層最下部と、南部の白人達の犠牲に於て、再生産のプロセスに黒人を初めとする「アウト・サイダー」を再編入するという方向をとった。他方に於てこれはアメリカの政治的危機をガラリと変え、初めはバラ色の幻想を、やがてはピシヨぬれの若い挫折を、被抑圧民衆である黒人達がせわすことになった。資本家のこうした「構造改革」の要求は、しかし政治的困難と、更には、国際的階級斗争の激化、ベトナム革命の勝利的前進によつて、そして更に通貨危機にもシボライズされるような財政的危機によつて、一歩を踏み出したばかりです。すでに露の危機に類している。六〇年代のバラ色の幻想は、シヨソンのベテネ劇という経過を経て、今や形式的にも、ニクソンの当選という形で終りをとげた。

現局面の背景をなす経済的側面の第二は、インフレの進行である。政治的不利をもおして税率引き上げに踏み切ったアメリカ政権は、今なおインフレの進行を止めることが出来ない。インフレによつてもつとも強く打撃をこうむつていゝと思われるのは、またしても中間層下部である。

来た……彼らにとつて、ブラック・アメリカ、スパンニシユ・アメリカ、プー・ホワイトのアメリカは、別世界である。彼らの、止むことなき、怒れる諸要求に対して彼ら中間階級は憤りをもつてきた。……「自由世界」の新しいリーダー達は、こうして持たざるものを理解出来ないのみではない。彼らにとつて、この体別に対して闘う青年達を理解することもまた、不可能である。この青年達は、ニクソンやアグニエー達から見れば、せいたく環境の中で育つて来た。ニクソンにとつて、恐らく彼ら青年はと憎むべきものはないのだ。……「ニクソンを選んだ人々の多くは、農村の、または大都市のアメリカ人だが、し彼らの多くが、一時ウオレスとい

△ニクソン後の展望▽

アメリカが、解決の展望を持たぬままに、かゝっている問題として、いくつかがあければ

1. ベトナム戦争
2. 通貨危機、インフレ
3. 世界的な、帝国主義軍体制の再編
4. 都市、貧困、黒人

といったものがあろう。

先ず、特に「テチエ事件」以後、西欧に於ける「前線」の再編強化という課題を持つアメリカ帝国主義にとつて、ベトナム革命の勝利的展望は、ますます逃れることの出来ないものとして出て来たわけだが、これは、政治的に重大な意味を持つただけではなく、当然ながら、現在の経済的危機にも関わつてくる。敗れた軍隊の兵士約五〇万というものが、労働人口として帰つてくる。軍事産業の「切りかえ」が若干必要になる。こうした状況は、デフレ政策を取ることの政治的困難さを強めるだろう。ある見方によれば、インフレ抑止政策の結果、来年下期には失業率の3%上昇が予測される。これは、しかし、黒人労働者にとつては、失業率の8-10%の上昇を意味するといふ。現在、白人の失業率は低いわけだが、黒人の間ではそうではない。戦争は、中間層の部分の失業率を低下させたばかりである。

現在では、当面、新大統領にとつて、インフレ抑止の抜本策は、政治的にも実行困難で

ちやついたのだ。結局、彼らはウオレスのホントなアプローチに対して、ニクソンのクールなやつをえらんだわけだが、ウオレスという最後の手段をとるまでに、ニクソンにやらせて見ようというわけなのだ。……「そつた、こうした階級のインシアティブの下に、大都市の腐朽、黒人、教育、貧困、青年……といった問題に直面することは、不可能である。リベライズムという改良主義的新保守主義は、今やアメリカに於て破たんしその破局を、アメリカの破局へとみちびくものとしての、新政権がある。一月二十日あたりに予想されるニクソンの就任式は、アメリカと世界に於ける帝国主義の死に至る病いの歴史の次のページを開くことになろう。

2 革命の

展望

アメリカの革命は、帝国主義打倒の世界革命の展望の中に初めて正しく位置づけることが出来る。これは正に帝国主義世界の心臓部に於ける革命であると同時に、ここに世界革命の持つ諸問題が、アメリカのいきよ縮されて現われている。「第三世界」の革命と、「帝国主義本國」内部の革命の、決定的相異

あるという見方が強い。そうした場合、かなり事態が悪化した後に初めて、相当ドラステイックなデフレ策が取られ、その結果、一九七〇-七一年あたりには、大規模な不況が訪されるだろうという見方がある。これは、国際的な通貨危機という状況と合わせて考えた場合に、注目すべき見方だと思われる。

こうした中で、国際経済、特に対ラテン・アメリカ関係に於ける私企業の進出の自由化市場競争の表面化という展望があり、他方に於ては、アジア、アフリカ、中近東、ヨーロッパ等、全域にわたる軍事的再編成という課題がある。

アジアに於いて、ベトナムをあげるまでもなく、英帝国の軍事的後退、日帝の経済的進出、ソ連の介入という事態の中で、発火点はなお、朝鮮、ラオス等に存在し、マレーシア等に於ける共産ゲリラの復活、インド、パキスタンでの激しい政治状況を見る。アメリカ帝国主義にとつて、南朝鮮、台湾での軍事的基盤を強化し、日帝の軍事的進出を、反革命の同盟者として促進するという方向が、当然出てくるし、オキナワ問題は、東南アジアに於けるかなめとして再び米国のブルジョア・ヤナリズムでも注目されている。

他方、NATOの再編強化は、すでに開始されているわけだが、西欧に於ける新たな緊張を形づくつてゆくことになろう。

こうした火急の任務と、ニクソンの政治的階層(階級?)の基盤は、しかし前述の第四

テストンティズム、アナーキズム、そしてまたアフロ・アメリカンの歴史という要因等と結びついた形であられ、千差万別の運動形態をとりながらでる。ここでは、特に最近のブラック・パンサー党(BPP)の動きと、反戦から反権力へという方向を明らかにしつつあるSDSを中心とした白人社会内部での動きに焦点をこめておこう。

(a) ブラック・パワーとBPP

ブラック・パワーのスローガンが、黒ひょうのマークと共に現われたのは、一九六五年アラバマのローンデス・カウティに於てであった。カーマイケルが、当時のローンデスカウティ・フリーダム・オーガニゼーション(SNCC)の組織だったが、彼によれば、昨日まで、おれ達はデモをやつて来た。今日、おれ達は政治権力をかく得なければならぬ。おれ達は必ず権力を奪取し、権力を確立する。……お前達、ひょうを見たとあるか？誰も、ひょうを手なづけることは出来ない。そして、ひょうを怒らせて見ろ、誰も止めることは出来ない。……やがてカーマイケルはSNCCの権力を取り南部の黒人コミュニティで生まれたブラック・パワーのスローガンと、黒ひょうのマークは急速に、全米の革命的黒人の間に広がる。カリフォルニアのオークランドで生まれたBPPは、しかし、ローンデス・カウティの組織とは別の形で生まれ、独自の路線をとつて

成長し、現在アメリカに於て最も戦斗的であり、革命的な展望を持つた黒人青年の政治組織である。

北部大都市の多くは、この数年の中にその人口の過半数を黒人によって占められるわけだが、このことを我々はフアンが「暴力論」の中で描く「引き裂かれた都市」を見ることが出来る。

白人の街、それはチリ一つない街、殺菌と消毒の行きついた街、ガラスと鉄とプラスチックの街である。それはネイティブ(土民)と、「罪」と、「愛」と、全く人間のなものを対して武装している街である。白人の街、最新の科学の成果と、富にあふれた街、スラムの海に浮ぶ敵意にみちた白い街には、しかしソウル(たましい)がない。黒人街即ちスラムの連続、小便のにおい、ビールの空ビンと紙くず、人間のめじめと人を狂気にみちびく自己けん悪と絶望と貧困と、展望のない暴力とが、白い恐怖と、白い法の暴力とによって永続化される。しかして、ソウルがある。北部のゲット、ここから黒ひよる党BPPが生まれる。

△フラック・パワーとBPP

ロスアンジェルス、ワットを火に包んだ暴動が、六〇万の黒い住民をまき込んだのが一九六五年夏だった。警察のヘリコプターは銃撃され、激しい銃撃戦の中で、多くの黒人が命を失った。こうして開かれた政治的風土の中から、全く方向を異にした一つのフラック・

パワーの運動が生まれる。一つは、ロイ・カレンガを中心とするUSという組織、徹底的に白人の価値を否定する点ではロイ・ジョーンズと同様であるが、そこからアフリカ文化の伝統へ帰れという方向を出すのである。フアンが、文化と、伝統について、その持つ二重の役割について語り、革命家は文化をも革命のプロセスの中で革命しなければいけないという態度を明確にしているわけだが、

ここでカレンガ達の組織は文化の物神崇拜に陥り、ひいてはフラック・キャピタリズムによるフラック・パワーの確立という、きわめて非革命的な路線をとるにいつている。これに反して、同じくアフロ・アメリカンの文化のこう定と、フラック・パワーのスローガンに立ちながらも、フアンの革命的方向を自らものにして現われたのが、BPPである。

カリフォルニア、オークランドの法科学生であったヒューク・ニュートンと、機関紙「ソウル・オン・アイス」の編集者エルドリッデ・クリューアー達によって組織されたBPPは、SNCCとも共闘関係をとりつ、黒人の自衛組織であり、革命党を目指すものとして建設された。彼らの十項目の「綱領」は極めて「大衆的」なものであり、いわば「アフロ・アメリカの「独立」をアピールするような内容を持つが、重要なことは、第一に、彼らが自らを、「第三世界」の一員と規定し、帝国主義世界の革命の任務をアメリカに於て

他の全ての被抑圧民衆ともにおうことを明らかにしていることであり、第二に、彼らが武装集団として大都市スラムの青年に対する大衆的影響を持ち、彼らを組織することに成功していることであり、第三に彼らが実際にライフル、ショット・ガンなどの武器によって権力とゲリラ戦を行っているということである。彼らの多くは、ヒューク・ニュートンをも含めて権力のとりこにされ、また多くが殺害されたが、今や彼らは全体的に数を増しつつある。帝国主義人種主義、資本主義に反対する彼らは、フラック・キャピタリズムを追求する路線を拒否し、黒人を解放するものは、帝国主義を全世界的に打倒する為の武装斗争であるということを明確にしている。

△BPPとSNCC

白人否定という方向を明らかにしたSNCCは、ともすれば黒人大学生などインテリ層にアピールし得ても、スラム大衆の組織を有効にはなし得なかつた。歴史も新しく、思想的にもまだ形成のプロセスにあると思われるBPPは、しかしよりはつきりと、黒人の革命的こう定という線を出しているように思われる。

大統領選挙の中で、BPPが、カリフォルニアのPPF(ピース・アンド・フリーダム党)という多くの潮流を含んだラディカルな市民的反戦組織と連帯して大統領候補にクリューアーを出したことは、SNCC等との間

に一定の論争をひき出したようである。いかなる形であれ選挙戦に現段階で参与することに疑いを持つSNCC、SDSは、このPPFとBPPのテイケントに対して全体としては積極的ではなかつたようである。

今、ニクソン後のアメリカにあつて、政府に対する何らの幻想も黒人にとつて持つことが許されない時、BPPは黒人の諸組織の中で、一つの前衛的役割りを果たさう。

(b) 反戦から反権力斗争へ

「プロテストから、レジスタンスへ」という叫びが明らかになつたのは一九六七年末のことであつた。徴兵拒否のレジスタンス、地域反戦、兵士へのアピール、ヴェトナム帰りの反戦兵士を中心とした労働者組織の努力、高校生の反戦、といった運動がベトナム現地の脱走、叛乱、米国内でのサボヤテロなどの個人的斗争と併行して起つている。UAW(自動車労組)など例外的なものを除いて、反戦運動は労組によつても弾圧され、特にAFL-CIOのジョージ・ミーニ、ラズストーンらの強硬な反共主義者によつて強い抵抗を受ける。労働者の組織は、学生らの「反戦、平和、非暴力」といつた方向によつては全く不可能であり、むしろフラック・パワーの権力を自指すスローガンが好感を持たれることがあつたといわれる。

サボタージユは最近になつて、より多くなつてきているようだが、また必ずしも組織

的とはいえないようである。最近の例をあげ

る。これは、デトロイト近辺で行われたといわれるものだが、軍用自動車、警察車などの爆破、郊外の徴兵オフィス、半地下のCIAオフィス、政府依頼の秘密軍事研究を行つていたミシガン大学の理工系施設などに八月以後、次々に爆弾がかけられた。「陰謀の疑い」で、十一名の青年がたい捕された。権力はこの「罪状」によれば、無差別に、現行犯かどうにかかわりなくたい捕を行うことが出来、「共同意思」の証明さえされれば、この起訴が成立することになるというものである。

より大衆的なレヴェルでも、運動は戦斗化している。徴兵オフィスの占拠、シット・イン等が組織されているし、例えば五月十七日にはマリランドで、カトリック神父のフィリップ・ベリカン兄弟が徴兵事務所のファイルを持ち出してガソリンをかけて焼き却てた(これによつて両神父は十八年の禁固刑を申し渡された。)

最近十月末から十一月にかけての例えば、ニューヨークのCCNY(シティ・カレッジ・オブ・ニューヨーク)では米陸軍の脱走兵士ビル・レイクンフィールドが、圧倒的な数の学生によつて守られ数日間権力から守り続けた後に百名以上の坐りこみを続ける学生全員が兵士をも含めて警察暴力を受けてたい捕されるという斗争があつた。

△思想的組織的再編

こうした現象の背景としてある今年始め以後の斗争の経過と、そこで問題にされていることがらについてふれておこう。

六八年初めのコロンビア学園斗争は、運動の転機を作つた。ベトナム反戦、人種主義反対、学生の権利獲得という三つのスローガンを中心にして起り、学長率占拠から、長期の学園のホール占拠と、「コミューン」設立という斗争が、白人SDSと、黒人の戦斗的部分との共闘というかたちで進められ、それが機動隊導入による暴力的粉砕というかたちで終わった。SDSとそのまわりの大衆に対してあるわれた警察暴力は、運動の質が、大衆的にも、「非暴力抵抗」という段階をのりこえるという結果を作つて、ここで始めてSDSの反体制運動が、情念的批判者としてのそれから、より直接的、全体的なものに移行しなければならぬ状況を形づくつた。ここで、恐らくこういつかたちでは戦後始めて、インターが歌われたという。

五月のフランスは、西欧に於ても運動がマルクゼの段階をのりこえたことを意味し、学生を中心とした部分が、今や単なる否定者アウト・サイダーとしてではなく、自己自身のうちに革命への論理を持つたものとして「否定の否定」、権力の転ぶ、権力奪取という方向をとり始めたことを意味する。巴黎クレイで、フランス学生との連絡を叫んで組織された大衆行動は、SDSによつて指導さ



れたが、こゝでも激しい暴力的弾圧を受けて、暴力的抵抗が大衆的に組織された。自然発生的に組織された小グループの行動委員会、都市ゲリラ斗争の遂行を可能にした。

春のジョンソンの「和平声明」、それに続くキング殺害、黒人叛乱という状況の中で、反戦運動の中の若干の部分の脱落と、また同時に、従来の単線的延長の上に反戦のスケジュール斗争の継続を主張した部分の孤立も見られたようた。SNCCは、これまでのような

形での機能、全国的反戦デモの実行委としての機能を失つてゆく。

大統領選挙をめぐる、ケネディ、マツカリーシーに対する幻想を組織しようとしたリベラルの部分、マス・コミに大きく扱われたが、SDSの部分、明確に、ハンフリー、ニクソン、ウオレスをそれぞれに暴露、弾が、投票拒否と、選挙期間を通じての全国的な動員によつて三候補に少しでも傷をつけるという路線をとつた。

シカゴに於ける民主大会は、シカゴを警察都市に変えた警戒の中で進み、全国から結集したミリタントに対する規制と、暴力は「アメリカの腐敗」と青年の力を再び明るみに出した。

選挙ボイコット斗争は、一〇・二四のニューヨークの戦斗的デモの警察暴力との対決、更に十一・五の全国行動に見られるように戦斗化してPDPの部分を含んだ形で進出した。こうした状況の中で、しかし、SDSは思想的組織的再編を迫られている。

直接的には、それは「毛沢東主義者」のPL（進歩労働党）によるSDS乗っ取り戦術に対抗するという必要に応じて出て来た。官僚主義反対、政策主義反対をその最も主要な路線としてきた彼らは、しかし、教条主義者、ゴリ幹のネオ・スターリニストに対立する為

に、理論的、組織的強化を迫られたのである。ブラック・パワーの運動が、「黒人支援」という形の白人ラディカル運動を拒絶してゆ

く中で、ベトナム反戦を軸に白人独自の体制変革運動として組織されたSDSの運動は、今や、アメリカ革命の内実、革命的「階級形成」、組織論etc.といった問題に直面しなければならぬ。

帝国主義打倒というスローガンが、むしろ資本主義の対外政策反対という内実を持つて「反戦」の運動に収約された時期は過ぎ去り、特にフランス五月を見た現在にあつては、資本主義打倒、革命、権力奪取という方向が

出される時期に入った。

しかし、古典マルクシズムが、むしろ状況によつてのりこえられ、新しいロジックと、新しい革命の内実が要請されている今、SDSにとつての問題は巨大であり深刻である。

階級形成論の一つの試論として出された、「新労働者階級」論は、まず、古典マルクシズムによれば、現在のアメリカ人口の九〇％は「プロレタリアート」であるにもかゝらず社会全体が、帝国主義的腐敗の泥沼に沈みこんでいる状況をふまえ、消費社会の持つ矛盾と、青年インテリが、それ自体一つの革命的必然性を、その社会的存在の中に持つているものとして、自らを「新労働者階級」と呼ぶ。それはサンディカリズムの革命的復活と、

4

キニューバ

△注 プテフリカ外相ラジエリア代表団が一九六八年十一月十三日キニューバを訪れた際発表された（ハバナ、十一月十三日）もの抜粋をあげる。一九六二年七月三日解放達成後六五年六月十九日ブレイメンエーラに

生産管理、地域的権力奪取斗争、全国的、中央権力斗争の結合を展望するものである。しばらく前まで、白人のラディカル達は、「ソウル」を探し求めに黒人の、あるいはベトナム人の中に入ろうと無駄な努力を続けた。しかし、「ソウル」は正に自己自身の中にのみを探すべきものたということ、これが、運動が今や自国帝国主義の根底的打倒を目指してゆく中で、明らかにされつつある。



共同コミニユニケ

よるベン・ベラからの政権奪取。六七年後期のソビエト大佐らの反乱等、アルジェリアの現状に於ては不明の点が多い。FLN党（民族解放戦線党）は社会主義革命の達成をスローガンにかゝける。革命直後の荒廃の中から

自然発生的に生まれた労働者、農民の生産管理の組織は、六三年春には中央集権的な形で再編され、現在種々の問題をかゝっているといわれる。現在までに農地の四〇％を回復した農地改革、それと併行する事業建設（ハ

ナバ製鉄工場等）、食品、繊維等の軽工業

石油、天然ガス、化学肥料等の産業開発、教育の組織（国家予算の六が教育予算）等キニューバと共に独自の社会主義建設路線を目指す中で多くの急務を持つ。主要産業（当量は石油採取を除く）、銀行の国有化、外国資本追放は六七年中に相済みエン、シエル、etc.の資本に影響を与えた。今年五月十四日以降に、この傾向は急速に進行し、外国資本をパニックにおとし入れた。国際的物資流通の多面化によるフランス帝国主義依存からの脱却が、フランス五月革命期に於けるフランスからのミルク補給ストップという契機をさかに強化されている。

民族ブルジョアジートの動向、それとFLNとの関係については、更に資料が必要である。「非同盟主義」といわれた国際路線も、今やキニューバ等第三世界の革命勢力との連帯を強化する方向に動きつつあると考えられる。

コミニユニケ内容
●●アルジェリア代表団とキニューバ指導部の会談の中で、両国の人民、党と政府の友好と連帯を強化する為の有意義な意見交換が行われた。

国際的諸問題に関する徹底的検討がなされ、中でもベトナム侵略、朝鮮の状況、中近東に於ける危機と、アフリカ、アジア、ラテン、アメリカに於ける解放運動の前進に関する諸点が強調された。

両国の関係に於いては、我々は相互の協

力関係を全ての分野に亘つて強化することに同意した。これはアルジェリアとキニューバがともに後進性に対する熾烈な闘いの真中であり、新たな社会の建設に向かつての相似た過程にあることを思うとき当然のことである。我々は、会談が兄弟的友情と真しな態度の中で行なわれたことに満足し、我々の例が、第三世界人民相互の連帯、協力、相互の關係の充実化といった目的への正しい方向を指示すであらうことを信じる。

ベトナム人民の英雄的斗争は、抑圧され侵略された人民が、断乎として帝国主義に對決するときには、これを打ち破ることが可能

であることを明確に証明した。我々はこの視点に立つて、ベトナム人民への支援を倍化しベトナム侵略の完全な中止を要求しベトナム民主共和国の主権の完全な尊重と、南部ベトナム人民の自決権の尊重とを要求する。我々は朝鮮人民の国家再統一への正当な希望を支持し、アメリカ帝国主義の彼らに對する挑発行為を弾劾する。中近東の危機に於いて、我々は帝国主義によつて支障されるどころのイスラエルによるアラブ人民に對する侵略行為の断乎たる弾がいの態度を再確認し、パレスティナ人民の、自己の尊厳と自由を回復する決意に燃えた闘い

5

チエコ侵入と

労働者国家をめぐる論争

ウエトナム反戦斗争からパリ五月革命、チエコの「自由化」「民主化」に對するワルシヤ条約による武力介入、これら一連の歴史的事件は現代世界の階級斗争の質あるいは性格を象徴している。そして、チエコへのソ連の軍事介入について、その後、シャーナリズム、帝国主義者たち、賊左翼、新左翼

インテリゲンチヤの語つてきたところのもの、反ソ、反共の色どられた感傷であった。我々に現在提出されている問題は、チエコ事件に象徴されるどころの東欧十国社会主義の諸矛盾がいかなるものであり、又ソ連の介入は何を意味するのか、を明らかにすることであらう。

を支持するものである。我々は、植民地主義、新植民地主義と帝国主義に反対するアジア、アフリカ、ラテン、アメリカ人民の斗争を断乎として支持し、三大陸人民の解放斗争との戦斗的連帯の意志をこゝに表明する。

ラウル・ロア・ガルシア
キニューバ 外相
アブデラジズ・プテフリカ
アルジェリア人民共和国 外相
ハバナ
一九六八年十一月十三日

チエコの「自由化」「民主化」とは何が？
まず歴史的にみるならばチエコも又、戦後ソ連の軍事力を背景とし、ヤルタ体制を生みの親として社会主義国建設を行つてきた。ところでチエコは他の東欧諸国が農業国である

(1)

チエコの「自由化」「民主化」とは何が？
まず歴史的にみるならばチエコも又、戦後ソ連の軍事力を背景とし、ヤルタ体制を生みの親として社会主義国建設を行つてきた。ところでチエコは他の東欧諸国が農業国である

の対し、東ドイツと共に戦前からの工業国であった。東欧諸国は、経済的にはコモコン(四九年成立)、軍事的にはワルシャワ条約機構(五四年成立)によって、ソ連の圧倒的なヘゲモニーの下に「社会主義圏」に組み込まれていった。チエコもコモコン体制の枠内で社会主義建設を行っていたわけであるが、スターリンの一国社会主義の当然の帰結といえるアウタルキー経済によって社会主義共同体の正常な発展が行われず、他の農業国の工業化への高い成長率に比べて、東欧諸国内でも最も成長率が悪く、一方農業生産も停滞しており、大幅な小麦の輸入をソ連に乞わなければならなかった。工業国であったことが、西側経済との分離と、他の東欧圏内における工業化によって一層の生産性の低下を招き、特に六三年においては前年を下回るような結果であった。これは、西欧帝国主義が戦後、米帝国主義によるマーシャル・プランなどの援助による復興と、イタリヤ、西ドイツにみられるようなめざましい発展からみると、生産力理論を基礎において社会主義建設を行っているチエコにとってみれば、きわめて大きな打撃であろう。チエコにおいては最も矛盾がたい積まれてきたわけだが、これと相まってルーマニアの「自由化」の動きが新しい経済政策への影響を与えたことを充分うかがうことができる。そして先に述べた一九六三年を境にしてチエコのスターリニストノボトニーによって部分的な経済改革が行われ、価

値体系の改革と結びついた分権化が行われた。しかしながら、中途半端な改革のため、むしろ矛盾はより大きくなった。それは、ノボトニー派のスターリニスト官僚の保守性によって示されるものであり、新たな改革を要請された。これがドプチェク派、新興官僚層の台頭であり、特に経済学者オタ・シクによって経済改革が推進されていった。ところでドプチェク派によって進められた「自由化」「民主化」とはどのようなものであつたらうか。

オタ・シクおよび改良派の改革は主に企業自律性を強化する非中央集権化と能率報酬制度であり、計画経済に自己規律的な市場メカニズムの導入によって弾力的な経済政策を行うことであつた。そして、一九六八年一月五日のノボトニー・チエコ党第一書記の解任後、ドプチェク第一書記によって進められてきた「自由化」は第一に経済改革における企業自律性という名の下にテクノクラートの自由を保障する事であり、又西ドイツ帝国主義との結合に代表される、ヨーロッパ経済との結合である。第二に「言論の自由」というきわめてブルジョワ的な自由を形式的に与えることによって、これまでのノボトニーの奪還としてあつた。それは主観的にはどうであれ、学生および知識人の「民主化」運動というものが結局のところブルジョワ的諸権利の要求にすぎず、ドプチェク路線を左から補充しているのだ。(しかしながら、この運動の

秘めている質については③でもう一度ふれよう)つまり、ドプチェクに代表される新興官僚層がイデオロギー的には「言論の自由」などを主張することによって大衆の「下から」の運動をつくりだし、それを利用することでスターリニスト官僚から権力を奪い、経営者、テクノクラートの利益を代表することである。チエコの国民経済の発展を示すことであつた。結局は、官僚同志の指導権争いであり、政権がスターリニストから若手リベラルな官僚にうつて変わったことにはすぎない。

ソ連が危機感を持つていることは、チエコが第二の「ハンガリア」になることであり、チエコ「自由化」の東欧諸国の連鎖反応を呼び起すこと、ソ連の「社会主義圏」への二元支配が揺らぐことのためであろう。だからこそ、ソ連の偽善性を非難し、一「反革命」に対する防衛という名目がチエコ人民にとつても又、ソ連人民にとつても支持されないものであり、このことが現在の世界中の「共産党」の分解をひき起こしたのである。ソ連の今回の介入によって、自らの反動性と反革命を自らの神話をこわすことによって暴露したのである。

④カストロ・キューバの見解は、チエコを「資本主義と將に帝国主義の方向を目指していった」とい、「反革命である」と定義する。しかもこれはチエコだけの問題ではなく、キューバを初めとするソ連、東欧はまさにこのような経済改革を行つていなければならないと指摘する。そしてチエコ・スロバキアの「反革命」「修正主義」に対するソ連の軍事介入を認めながらも、「もしも仮に、二〇年の後に革命を救つたために、あつたことが必要になるのだとしたら、一体その革命とは何なのか?」と云い、又、「もしもアメリカ帝国主義がベトナムにたいする侵略行為を強化し、ベトナム人民がそうした援助を要請したら、やはりワルシャワ条約軍がベトナムに派遣されるだろうか。アメリカ帝国主義が朝鮮民主主義人民共和国を攻撃した場合、かれらはワルシャワ条約軍を朝鮮に送るだろうか。アメリカ帝国主義がわが国を攻撃した場合、いがあるいはわが国がそれを要請すればかれらはワルシャワ条約軍をキューバに送るだろうか。」とも云う。このカストロ演説にみられる主要な問いこそ現在の「労働者国家」の世界革命に対する任務が何であり、何をなすべきかということであろう。(これは最後にもう一度ふれよう。)

以下に世界の左翼と考えられている諸党派のチエコ事件についての評価を簡単に紹介して置く。

西ドイツのSPDのWAS JUN 派は以下のように主張する。

ソ連の革命以後のスターリン体制下の経済的發展自体「ネオ資本主義」的なものであり、この矛盾はスターリン批判以後も変わらない。これがソ連の人民共和国をブルジョア化と従属化を生み出したのだ。チエコにおいてもドプチェク派が公然と行おうとした改革はすでにポトニー政権下で行なわれたものである。ドプチェク派の依拠しているのは経済計画官であり、技術者である。彼らは大衆の「個人的自由」を拡大することによって「社会主義が達成したものを解体する過程」をおしすすめているのである。だからソ連の侵入によってチエコの内部矛盾は貫徹していく。しかしこれこそが人民を客観的な革命へとかりたてていくものであること。

一九五六年ハンガリアから学びとらなければならぬ。

米、ミタラント紙では、ソ連のチエコ侵入を批判し、チエコの新しい反官僚主義の大衆の運動を支持している。またカストロ演説の批判としては、カストロが「二千語宣言」にふれないで、ソ連の「反革命論」を支持してこの介入を判断しているのは誤りであること。チエコの運動は(1)反革命ではなく、共同所有、社会的民主主義の追求であり、(2)むしろ問題は「反革命」かどうかではなく、ソ連は反官僚主義の波及を恐れて介入したのであること。

「修正主義」に対するソ連の軍事介入を認めながらも、「もしも仮に、二〇年の後に革命を救つたために、あつたことが必要になるのだとしたら、一体その革命とは何なのか?」と云い、又、「もしもアメリカ帝国主義がベトナムにたいする侵略行為を強化し、ベトナム人民がそうした援助を要請したら、やはりワルシャワ条約軍がベトナムに派遣されるだろうか。アメリカ帝国主義が朝鮮民主主義人民共和国を攻撃した場合、かれらはワルシャワ条約軍を朝鮮に送るだろうか。アメリカ帝国主義がわが国を攻撃した場合、いがあるいはわが国がそれを要請すればかれらはワルシャワ条約軍をキューバに送るだろうか。」とも云う。このカストロ演説にみられる主要な問いこそ現在の「労働者国家」の世界革命に対する任務が何であり、何をなすべきかということであろう。(これは最後にもう一度ふれよう。)

以下に世界の左翼と考えられている諸党派のチエコ事件についての評価を簡単に紹介して置く。

西ドイツのSPDのWAS JUN 派は以下のように主張する。

ソ連の革命以後のスターリン体制下の経済的發展自体「ネオ資本主義」的なものであり、この矛盾はスターリン批判以後も変わらない。これがソ連の人民共和国をブルジョア化と従属化を生み出したのだ。チエコにおいてもドプチェク派が公然と行おうとした改革はすでにポトニー政権下で行なわれたものである。ドプチェク派の依拠しているのは経済計画官であり、技術者である。彼らは大衆の「個人的自由」を拡大することによって「社会主義が達成したものを解体する過程」をおしすすめているのである。だからソ連の侵入によってチエコの内部矛盾は貫徹していく。しかしこれこそが人民を客観的な革命へとかりたてていくものであること。

一九五六年ハンガリアから学びとらなければならぬ。

米、ミタラント紙では、ソ連のチエコ侵入を批判し、チエコの新しい反官僚主義の大衆の運動を支持している。またカストロ演説の批判としては、カストロが「二千語宣言」にふれないで、ソ連の「反革命論」を支持してこの介入を判断しているのは誤りであること。チエコの運動は(1)反革命ではなく、共同所有、社会的民主主義の追求であり、(2)むしろ問題は「反革命」かどうかではなく、ソ連は反官僚主義の波及を恐れて介入したのであること。

「修正主義」に対するソ連の軍事介入を認めながらも、「もしも仮に、二〇年の後に革命を救つたために、あつたことが必要になるのだとしたら、一体その革命とは何なのか?」と云い、又、「もしもアメリカ帝国主義がベトナムにたいする侵略行為を強化し、ベトナム人民がそうした援助を要請したら、やはりワルシャワ条約軍がベトナムに派遣されるだろうか。アメリカ帝国主義が朝鮮民主主義人民共和国を攻撃した場合、かれらはワルシャワ条約軍を朝鮮に送るだろうか。アメリカ帝国主義がわが国を攻撃した場合、いがあるいはわが国がそれを要請すればかれらはワルシャワ条約軍をキューバに送るだろうか。」とも云う。このカストロ演説にみられる主要な問いこそ現在の「労働者国家」の世界革命に対する任務が何であり、何をなすべきかということであろう。(これは最後にもう一度ふれよう。)

以下に世界の左翼と考えられている諸党派のチエコ事件についての評価を簡単に紹介して置く。

西ドイツのSPDのWAS JUN 派は以下のように主張する。

ソ連の革命以後のスターリン体制下の経済的發展自体「ネオ資本主義」的なものであり、この矛盾はスターリン批判以後も変わらない。これがソ連の人民共和国をブルジョア化と従属化を生み出したのだ。チエコにおいてもドプチェク派が公然と行おうとした改革はすでにポトニー政権下で行なわれたものである。ドプチェク派の依拠しているのは経済計画官であり、技術者である。彼らは大衆の「個人的自由」を拡大することによって「社会主義が達成したものを解体する過程」をおしすすめているのである。だからソ連の侵入によってチエコの内部矛盾は貫徹していく。しかしこれこそが人民を客観的な革命へとかりたてていくものであること。

一九五六年ハンガリアから学びとらなければならぬ。

米、ミタラント紙では、ソ連のチエコ侵入を批判し、チエコの新しい反官僚主義の大衆の運動を支持している。またカストロ演説の批判としては、カストロが「二千語宣言」にふれないで、ソ連の「反革命論」を支持してこの介入を判断しているのは誤りであること。チエコの運動は(1)反革命ではなく、共同所有、社会的民主主義の追求であり、(2)むしろ問題は「反革命」かどうかではなく、ソ連は反官僚主義の波及を恐れて介入したのであること。

①詳しく述べたようにコモン体制の中でのソ連二元支配に対して、自国経済の伸びをみながら、ソ連への民族的反感という形でコモン体制からの自立という形態をとつていかざるを得ない。それと共に国内においては産業地域であるチエックと農業地域「労働力供給源であるスロバキアとの間に前者に対する後者の反撥という民族的要素が加わっている。

②チエコにおける「民主化」「自由化」について、『千語宣言』と『チエコ共産党行動綱領』がある。しかし、『千語宣言』に表わしているのは「検閲の廃止」「表現の自由」などのきわめてブルジョワ的な基本的権利の確認であつて、形式的なものにすぎない。ここで評価できることは、チエコにおける「下から」の運動の存在が若干感じられるだけであつて、社会主義圏における改革の性格を理論的に明らかにしてはくれないし、我々も又これを見てチエコの運動に両手を挙げて喜ぶことはできない。むしろ我々はブラハ・クラブから発表された「共通の立場」という論文に関心をひける必要がある。ただし、これ今回あるいは今後の運動にとれた際の主体の能力があるかは疑問であるが……。主要な点をまず紹介しよう。

打倒されていないから。
 (a)この階級斗争は主に上部構造、イデオロギーの面である。生産手段の形式的国民の所有から党官僚の発生と、生産者との対立が生じること。階級構造の再現の危険性。
 (b)を避けるために(1)、社会主義革命の永続化。(2)、人民大衆の参加、そして単なる消費生活の否定とイデオロギー斗争の強調
 (c)党がもう一度労働者の先頭に立つ必要性。
 Ⅰ 党内民主主義。Ⅱ 生産者の自主管理機関(特にストライキ権とストライキ基金創設)。Ⅲ プロレタリア・インターナショナル主義の諸原則の確認。
 ショナリズムの諸原則の確認。
 以上であるが、今回のチエコの運動について彼らは、ノボトニー指導下においては「国家官僚主義的搾取」が顕著であつたとし、今回の運動を「社会主義的民主主義再建」と位置づけている。しかしながらドプチエクに代表されているところの「民主的仮面」にかくれた「新しい社会階級」としての特徴を持つ特定の社会層の登場」の可能性を認めている。それに対して彼らは「発達した段階における社会主義とは、生産者の社会的自主管理体制である」と定義づけ、労働者—生産者のインシテイクによる運動を強調している。

内部の新しい左派の登場に我々は支援を送らなければならぬだろう。しかし現実的には彼らも指摘するところ、「新官僚派」の台頭の方が重要であるし、右への揺れが多数を占めていると思われ。現に、ドプチエクに代表されるリベラルの日見主義の指導下のチエコの叫びを行なわなければならない。
 (c)新官僚派による「上から」の「民主化」「自由化」と、「下から」の運動を「ブルジョワ的」基本権利と自由の追求と民族主義によつてチエコ国民経済の発展という展望の下に進歩派のヘゲモニーを貫徹してゆくかのようにならなければならない。八月二日のワルシャワ条約軍の侵入と共に事態は新たな局面をひかえた。それは軍事力を背景としたソ連の圧力により、ドプチエク派路線の一時のなしいしある程度の譲歩を必然的に生み出した。だが、これまでの彼らの改良はワルシャワ条約軍の侵入によつて大衆の中に民族主義的、反ロシア的なふんいきをつくり出したのではないか。それは「上から」の形式的な「民主化」「自由化」すらもこれまで政治的アパシー状況を進行していたスターリニストの保守派の政治からの大衆の権力への指向という自然発生性ないし左派による「上から」の「民主化」「自由化」を労働者への権力の移行あるいはそれらの実質化という運動へ発展していく可能性を秘めはじめた。しかし、「上から」の「民主化」「自由化」もドプチエク派による完全な掌握のなされる以前にソ連の介入によ

つてむしろドプチエク派自身の日和見性が暴露され、例え現在はソ連の軍事力によつて危機を避けることができたとしても今後階級斗争として斗われざるを得ない矛盾を露呈したと考えられる。それは新経済政策の「自由化」も必然的に限界が明らかになり、ソ連からのしめつけにより今後の展望を切り開かず、先に述べた大衆自身の「上から」の「民主化」を乗り越えようとする運動と結びついたときさらに根本的な斗争が斗われるであろう。
 (d)最後に、今回のチエコの運動を世界革命の展望の中で語るならば、ベトナム戦争を軸として、後進国解放斗争の必然的な反帝斗争の質が、先進国におけるこの間の世界的規模の反戦斗争を巻き起こした。これは、帝国主義の侵略、反革命、抑圧によつて、先進国、後進国、「労働者国家」への同時的、同質的階級斗争をもたらした。世界階級斗争の統合の条件をもたらすことの表われであるし、チエコ「事件」も又、この国際階級斗争の激動に巻き込まれたといえる。以上のように把握するならば、チエコを正しく世界階級斗争の中に位置づけることは、チエコをキューバと共に社会主義社会の根拠地に転化していくことである。又、我々先進国においてはチエコとの反革命を具体的に生み出すところの自国帝国主義の侵略・反革命・抑圧を粉碎することである。それは特にチエコとの経済圏の結合をはかるところのヨーロッパ、特にドイツ。

プロレタリアートの自国帝国主義打倒の任務は重大であらう。以上がわれわれのチエコのプロレタリアートへの支援である。

「国際階級斗争資料集」

発行にあたって

国際共産主義運動の理論―実践の日本階級斗争の現局面に、その革命的翼の広さと深さを一点鋭さに永続性と国際性の外化として、共産主義者同盟に国際部が設置され、その任務が全戦線の同志、及び斗争労働者学生諸君に要請される現在の階級斗争の方向性と同質のものとしてある。

8・3 国際反戦斗争をわが国際部は主体的に担い、その総括点を実体化すべき各国階級情勢の情報交換、相互討論、就中、国際反帝派連絡協議機関設置から、国際反帝学連への領導に、至る過渡的組織方針をもって現在の任務を遂行しつつある。

ベトナム解放斗争が各国組織を分解再編し、世界革命―プロ独への綱領的深化の陣痛を自己のものとしつつあるSDSをはじめ各国新左翼の組織的再編の現局面を情勢との関連で特集し、資料集のNo.1とし、プロレタリア国際主義の旗の下に斗争全同志のもとに、おとどける。

国際階級斗争資料集 No.1

発行日 1968年12月1日

編集責任 共産主義者同盟国際部

千代田区神田三崎町2-7-6

滝沢ビル内 戦旗社気付

TEL 264-2961

印刷所 株式会社 けやき印刷

調布市深大寺町2368番地

TEL 0424 (82) 7912

頒価 100円

